

茨城県教育財団文化財調査報告第138集

一般国道50号下館バイパス改築工事  
地内埋蔵文化財発掘調査報告書

八丁台遺跡

作業室用

平成10年6月

建設省  
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第138集

一般国道50号下館バイパス改築工事  
地内埋蔵文化財発掘調査報告書

はっちょうだい  
八丁台遺跡

平成10年6月

建設省  
財団法人 茨城県教育財団

## 序

下館市内を通る一般国道50号線は、群馬県前橋市を起点とし、茨城県水戸市に至る延長約150kmの広域的な幹線道路であり、産業、経済活動を支える動脈として、極めて重要な路線であります。

しかしながら、近年、下館市内において、慢性的な交通渋滞が発生し、その解消を図るためバイパスの整備が強く望まれてきたところであります。しかし、その予定地内には埋蔵文化財包蔵地である八丁台遺跡が所在しております。

このたび、財団法人茨城県教育財団は、建設省から埋蔵文化財発掘調査事業についての委託を受け、平成9年1月から平成9年3月にかけて発掘調査を実施して参りました。

本書は、八丁台遺跡の調査成果を取録したものであり、本書が学術的な研究資料としてはもとより、教育・文化の向上の一助として広く活用されますことを希望いたします。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である建設省から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、下館市教育委員会をはじめ、関係機関及び関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成10年6月

財団法人 茨城県教育財団  
理事長 橋本 昌

## 例 言

- 1 本書は、建設省の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成9年1月から平成9年3月まで免掘調査を実施した、茨城県下館市大字中館字西八丁304番地ほかに所在する八丁台遺跡<sup>（おちゅうだい）</sup>の免掘調査報告書である。
- 2 八丁台遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	橋本 昌	平成7年4月～	
副 理 事 長	中島 弘光	平成7年4月～	
副 理 事 長	齋藤 佳郎	平成8年4月～平成10年3月	
副 理 事 長	川俣 勝慶	平成10年4月～	
常 務 理 事 長	梅澤 秀夫	平成8年4月～平成9年3月	
常 務 理 事	齋藤 紀彦	平成9年4月～	
事 務 局 長	小林 隆郎	平成8年4月～平成9年3月	
事 務 局 長	西村 敏一	平成9年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長	沼田 文夫	平成8年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長 代 理	河野 佑司	平成6年4月～	
企 業 管 理 課	課 長	小幡 弘明	平成8年4月～平成9年3月
	課 長	鈴木 三郎	平成10年4月～
	課 長 代 理	根本 達夫	平成7年4月～
	課 長 代 理	清水 薫	平成8年4月～平成10年3月 (平成8年4月～平成9年3月係長)
	主 任 調 査 員	小高五十二	平成8年4月～平成10年3月
	主 任 調 査 員	池田 晃一	平成10年4月～
経 理 課	主 事	川崎 敦司	平成10年4月～
	課 長	河崎 孝典	平成8年4月～平成9年3月
	課 長	佐藤 健	平成10年4月～
	主 査	田所多佳男	平成8年4月～
	課 長 代 理	大高 春夫	平成7年4月～平成9年3月
	課 長 代 理	清水 薫	平成10年4月～
	主 任	小池 孝	平成7年4月～平成10年3月
	主 任	宮本 勉	平成9年4月～
調 査 一 課	主 任	木下 光保	平成10年4月～
	主 事	柳澤 松雄	平成8年4月～平成9年3月
	課 長 (部長兼務)	沼田 文夫	平成8年4月～
	調 査 第 三 班 長	鶴見 貞雄	平成8年4月～平成9年3月
整 理 課	主 任 調 査 員	川津 法伸	平成9年1月～平成9年3月 調査
	主 任 調 査 員	土生 朗治	平成9年1月～平成9年3月 調査
整 理 課	課 長	川井 正一	平成10年4月～
	主 任 調 査 員	川津 法伸	平成10年5月～平成10年6月 整理・執筆・編集



## 凡 例

- 1 八丁台遺跡を発掘調査するに当たり、遺跡及び遺構の位置を明確にするため調査区域を設定した。

調査区の設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし、X軸 = +35,840m, Y軸 = +12,680mの交点を基準点 (A1a1) とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40mの大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へとA, B, C・・・J, 西から東へ1, 2, 3・・・0とし、「A1区」、「A2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa, b, c・・・j, 西から東へ1, 2, 3・・・0とし、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。

- 2 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 住居跡-SI 土坑-SK 溝・堀-SD 古墳-TM ビット-P  
 遺物 土器-P 土製品-DP 石器・石製品-Q 金属製品-M 拓本土器-TP  
 土層 擾乱-K

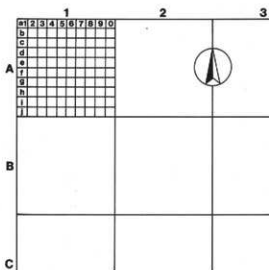
- 3 遺構及び遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。

 = 炉
  = 焼土
  = 粘土
  = 織維土器  
 ● = 土器
 ○ = 土製品
 □ = 石器・石製品
 △ = 金属製品

- 4 土層解説と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

- 5 遺構と遺物実測図の作成方法及び掲載方法については、次の通りである。

- 各遺構の実測図は、60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。
- 遺物の実測図は、原則として3分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては、個々にS = 1/○と表示した。
- 「主軸方向」は、炉を通る軸線とし、その軸線が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。(例N-10°-E, N-10°-W) なお、[ ] を付したものは推定である。
- 土器の計測値は、A-口径、B-器高、C-底径、D-高台径、E-高台高とし、単位はcmである。なお、現存値は( )で、推定値は[ ]を付して示した。



第1図 調査区呼称方法概念図

# 目 次

序

例言

凡例

第1章 調査経緯 .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 調査経過 .....	1
第2章 位置と環境 .....	2
第1節 地理的環境 .....	2
第2節 歴史的環境 .....	2
第3章 遺跡 .....	9
第1節 遺跡の概要 .....	9
第2節 基本層序 .....	9
第3節 遺構と遺物 .....	10
1 竪穴住居跡 .....	10
2 古墳 .....	17
3 堀 .....	22
4 土坑 .....	25
5 溝 .....	33
6 遺構外出土遺物 .....	35
第4節 まとめ .....	38

写真図版

## 插图目次

第1图	調査区呼称概念図	第14图	第2号墳(1)	20
第2图	八丁台遺跡地区設定図	第15图	第2号墳(2)	21
第3图	周辺遺跡分布図	第16图	第1・2号墳出土遺物	21
第4图	八丁台遺跡遺構全体図	第17图	第1号堀土層	23
第5图	基本土層図	第18图	第1号堀出土遺物	24
第6图	第1号住居跡	第19图	第10号土坑・出土遺物	25
第7图	第1号住居跡出土遺物	第20图	第42号土坑・出土遺物	26
第8图	第2号住居跡	第21图	土坑(1)	27
第9图	第2号住居跡出土遺物(1)	第22图	土坑(2)	28
第10图	第2号住居跡出土遺物(2)	第23图	土坑(3)	29
第11图	第3号住居跡	第24图	土坑(4)	30
第12图	第3号住居跡出土遺物	第25图	溝	34
第13图	第1号墳	第26图	遺構外出土遺物	36

## 表目次

表1	八丁台遺跡周辺遺跡一覧表	5	表3	八丁台遺跡土坑一覧表	32
表2	八丁台遺跡住居跡一覧表	17	表4	八丁台遺跡溝一覧表	33

## 写真図版目次

PL 1	調査前全景, 遺構確認状況, 調査完掘全景 第1号住居跡, 第8・10号土坑完掘, 第1 号住居跡遺物出土状況, 第2号住居跡完掘	PL 4	第32・37・39・40・42・50・53号土坑完掘, 第42号土坑遺物出土状況
PL 2	第2号住居跡遺物出土状況, 第3号住居跡 完掘, 第1号墳完掘, 第1号墳土層, 第2 号墳全景, 第2号墳確認状況, 第2号墳石 室南壁(北から)	PL 5	第1・2号住居跡, 第2号墳, 第1号堀出土 遺物
PL 3	第2号墳主体部確認状況(北から), 第2 号墳遺物出土状況, 第1号堀完掘, 第1・ 2・10・23・27号土坑完掘	PL 6	第1・2号住居跡, 第1号墳, 第1号堀, 第 10・42号土坑, 遺構外出土遺物
		PL 7	第1号住居跡, 第42号土坑, 遺構外出土遺物
		PL 8	第2・3号住居跡, 第2号墳, 遺構外出土遺 物



# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

一般国道50号線は、群馬県前橋市を起点とし、茨城県水戸市に至る延長約150kmの広域的な幹線道路で、重要な役割を果たしてきた道路である。しかしながら、沿線地域の近年における目覚ましい発展は交通量の増加を招き、さらなる発展を目指していくには道路網の整備を図る必要が生じた。そうした中、建設省関東地方建設局（常陸工事事務所）は、下館市内に一般国道50号線下館バイパス改築工事を計画した。

工事に先立ち、建設省関東地方建設局（常陸工事事務所）は、平成3年8月30日に茨城県教育委員会に対し、この予定地内である下館市八丁台地区における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会した。これを受け、茨城県教育委員会は、平成6年7月18日に現地踏査、平成7年2月15日から16日に試掘調査を実施し、平成7年3月27日に建設省関東地方建設局（常陸工事事務所）あてに事業地内に八丁台遺跡が所在することを回答した。平成7年12月19日から、建設省関東地方建設局（常陸工事事務所）と茨城県教育委員会は、埋蔵文化財の取り扱いについて、文化財保護の立場から慎重な協議を重ねてきた。その結果、茨城県教育委員会は、平成8年1月25日、八丁台遺跡については、記録保存とする旨を建設省関東地方建設局（常陸工事事務所）に回答をし、調査機関として財団法人茨城県教育財団を照会した。

茨城県教育財団は、建設省関東地方建設局（常陸工事事務所）と埋蔵文化財発掘調査に関する業務委託契約を締結し、平成9年1月1日から八丁台遺跡の発掘調査を実施することとなった。

## 第2節 調査経過

八丁台遺跡の調査は、平成9年1月1日から平成9年3月31日までの3か月にわたり実施した。以下、調査経過の概要を月ごとに記述する。

- 1月上旬 6日から事前準備を開始し、続いて器材の搬入など発掘調査のための諸準備を行った。8日から補助員を投入して八丁台遺跡の試掘を開始し、16日には終了した。
- 1月下旬 21日から23日まで悪天候により作業が中止となり、24日から重機による表土除去及び遺構確認作業を開始した。31日には、表土除去及び遺構確認作業が終了し、遺構確認数は堅穴住居跡3軒、古墳2基、土坑39基、堀1条、溝5条であった。
- 2月上旬 10日には方眼杭打ち測量を実施し、堅穴住居跡を中心に遺構調査を開始した。第1・2号住居跡からは、多数の弥生土器片が出土した。
- 2月中旬 堅穴住居跡の調査と並行して、土坑及び古墳の調査を行った。
- 2月下旬 古墳の調査と並行して、溝及び堀の調査を行った。堀は調査区を縦断して延びており、深さが2mほどあり、かなりの時間を費やした。
- 3月上旬 溝及び堀の調査を引き続き行った。
- 3月中旬 遺構調査をおおむね終了したのに伴い、17日に委託者に対する報告会を実施し、18日には完全部景の航空写真撮影を実施した。
- 3月下旬 補足調査及び安全対策を行いながら、これまで作成した図面類の点検、修正を行い、19日にはすべての調査を終了し、24日には安全対策を含めた撤収作業を完了した。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

八丁台遺跡は、茨城県下館市大字中館に所在し、下館駅から北約2.5kmに位置している。遺跡のある下館市は、茨城県の西部に位置し、北は栃木県芳賀郡二宮町、東は真壁郡協和町、南は河郡明野町、河郡岡城町、西は結城市、栃木県小山市に接している。

下館市の地形は、洪積台地である南北に延びる下館台地と、下館台地を挟むように東側に小貝川水系（小貝川、五行川、大谷川）と西側に鬼怒川が流れ、それらの河川が形成した沖積低地とからなっている。下館台地は、下館付近で大谷川低地によって二分され、大谷川低地の東側の台地は北へ延び、栃木県真岡付近より宝積寺にわたる宝積寺台地に続く。下館市街地は、五行川右岸からこの台地へと展開している。また、大谷川西岸の台地は、より広く南へ延び、その南端は下妻市街地付近にある。

下館台地は、南北に浸食する谷が何条も入り、台地が分断されている。さらにこれらの谷から派生する支谷によっても、台地が分断され、かなり複雑な地形となっている。標高は、下館市街地北方の中館付近で47mと高く、南の野殿付近で37m、南端の下妻市大宝城跡付近で29mと、北から南へと高度が低下している。

台地の地層は、第四期洪積世成田層を基盤として成田下層、成田上層、黄褐色砂や黄褐色粗砂を含むヶ崎砂礫層、その上に灰白色の粘土層である常総粘土層、そして、表土の下を厚く覆う赤褐色の関東ローム層がのっている。

八丁台遺跡は、下館市街の北部、JR真岡線下館二高前駅から北東に直線で700mほどの南北に細長く延びる標高約45mの台地上に位置している。台地の西側には大谷川の沖積低地が開け、また、東側の台地すぐ下には五行川が流れ、まもなく小貝川に合流する。この低地は水田として利用されている。低地との比高は10mほどである。調査前の現況は宅地、雑種地である。

#### 参考文献

- ・下館市教育委員会 『下館市史』 1968年3月
- ・下館市教育委員会 『下館の文化財』 1992年3月
- ・大森 昌衛、蜂須 紀夫 『茨城の地質をめぐって』 1987年8月

### 第2節 歴史的環境

下館市は、河川の流域に展開する沖積地帯と台地の交錯する地域で、古くから開け、常陸国（茨城県）と下野国（栃木県）を結ぶ要衝の地であるとともに、政治、経済、教育、文化の中心でもあった。鬼怒川の左岸台地をはじめ、小貝川、五行川、大谷川などの水運に恵まれた河川沿いの台地には、『茨城県遺跡地図<sup>(1)</sup>』によると多くの遺跡が分布している。特に、河川に近い台地上には、各時代にわたる人々の生活の跡が認められる。

ここでは、『茨城県遺跡地図』に記載されている当該遺跡周辺の主な遺跡について、時代別に概説する。

縄文時代の遺跡は、鬼怒川左岸や大谷川右岸の台地上に、数多く見られる。縄文時代前期の遺跡は、早期から晩期にわたる土器が出土しており、市域で最古の遺跡のひとつにあげられている。縄文時代前期の遺跡は、

十二天遺跡がある。この遺跡からは、関山式期、諸磯式期にかけての土器片が採集されているが、現在は埋滅している。中期の遺跡は、前原遺跡、大岡遺跡などがある。大岡遺跡は、小貝川右岸の低地に立地しており、遺跡の性格を考えるうえで、興味深い遺跡である。中期、後期、晩期の遺跡では、女方墓遺跡、外塚遺跡(9)などがある。外塚遺跡は、大谷川左岸の低地に立地しており、昭和56年に下館市教育委員会により発掘調査が実施されている。遺物は、縄文時代後期の称名寺Ⅰ式期から安行Ⅱ式期までの土器が多量に出土している。

弥生時代の遺跡は極めて少なく、中期前半の標式遺跡となった女方遺跡(3)がある。今回調査した八丁台遺跡からは、南西約7kmに位置している。当遺跡は、昭和14年から3年間にわたり発掘調査が行われ、土坑41基と数基の埋蔵、土器包含層が確認されている。特に、第15号土坑から出土した人面壺型土器は、耳、目、鼻、口が粘土紐によって表現されており、優品として著名である。遺構の性格は、再葬墓と考えられている。

古墳時代の集落跡は、野殿深作遺跡(4)、野殿深作東遺跡(5)、十二天遺跡、女方遺跡、女方本田前遺跡、元村遺跡(6)、女方墓遺跡、前原遺跡、元坪遺跡など数多く確認されているが、調査例が少なく不明な部分が多い。

古墳の分布は、島古墳(5)、北茂田古墳群、南台古墳群などがある。鬼怒川左岸台地には、女方古墳群がある。以前は、48基存在していたといわれるが、開発等で現存するのは3基である。その中で、昭和27年から28年にかけて日本大学考古学会により発掘調査された3号墳(藤の越古墳)は、直径約24mの円墳である。礫を小口積みした石室から、人骨片と鉄器片及び墳丘をとりまく埴輪列から円筒埴輪14点、埴輪馬2点、人物埴輪7体分が出土した。女方古墳から北へ500mの地点に弁天古墳群、南へ800mの関城町には県指定史跡である船玉古墳群(7)がある。船玉古墳は一辺が約35mの方墳で、横穴式石室を持ち、壁画が赤色顔料で描かれているが判然としない。大谷川右岸の不動坂遺跡は、縄文時代、弥生時代、古墳時代の複合遺跡であり、昭和50年に削土作業中に石棺が発見された。石棺には、人骨2体が合葬され、副葬品として鉄刀、刀子、鉄鏃、耳環等が出土した。石棺は、小さな石材を積み上げた構造を持っている。富士東古墳(4)は、八丁台遺跡の北約800mほどに位置している。元村遺跡の南約1kmの大谷川左岸には、西方古墳(7)、西方新塚古墳(8)がある。

奈良・平安時代の遺跡は未確認であるが、律令制下において、当市域は常陸国新治郡に属し、協和町には新治郡衙がおかれた。『新編常陸国誌』によれば、当市域は、竹島郷・博多郷・沼田郷・伊達郷に比定される。新治郡は平安末期までに東郡・中郡・西郡・小栗御野に四分されたが、市域はそのうち西郡・小栗御野が該当する。西郡はさらに南条・北条に別れ、南条は赤郡、北条は伊佐郡と称した。

中世に至っては、天永2年(1111)に藤原実朝が伊佐氏を名のり、伊佐城(3)を中心に勢力を張った。「しもだて」の名称が歴史上に登場してくるのもこの時期である。

南北朝動乱期には、奥州伊達氏の祖とされる伊佐氏が南朝方に呼応し、中館・伊佐城に拠って北朝勢と激しい戦いを繰り広げたが、興国4年(1343)に伊佐城は陥落している。伊佐氏の滅亡後、文明10年(1478)に結城氏の家臣水谷氏が下館地方を与えられ、下館城(2)を築き、今日の下館市の基礎を築いた。

## 注

- (1) 茨城県教育委員会 「茨城県遺跡地図」 1990年3月
- (2) 下館市教育委員会 「外塚遺跡」 1985年3月
- (3) 茨城県 「茨城県史料 考古資料編 弥生時代」 1991年3月
- (4) 茨城県教育財団 「茨城県県西生涯学習センター建設用地内埋蔵文化財調査報告書 野殿深作遺跡」  
「茨城県教育財団文化財調査報告書第91集」 1993年3月
- (5) 下館市教育委員会 「野殿深作東遺跡」 1996年3月

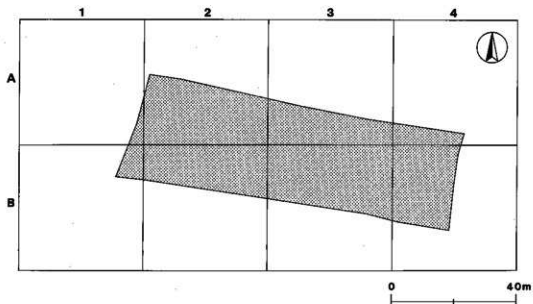
- (6) 八幡 一郎 「茨城県真壁郡女方古墳群」 【日本考古学年報 5】 1957年3月  
(7) 関城町教育委員会 「関城町史通史 上巻」 1987年3月  
(8) 中山 信名 「新編常陸国誌」 崋書房 1978年12月

参考文献

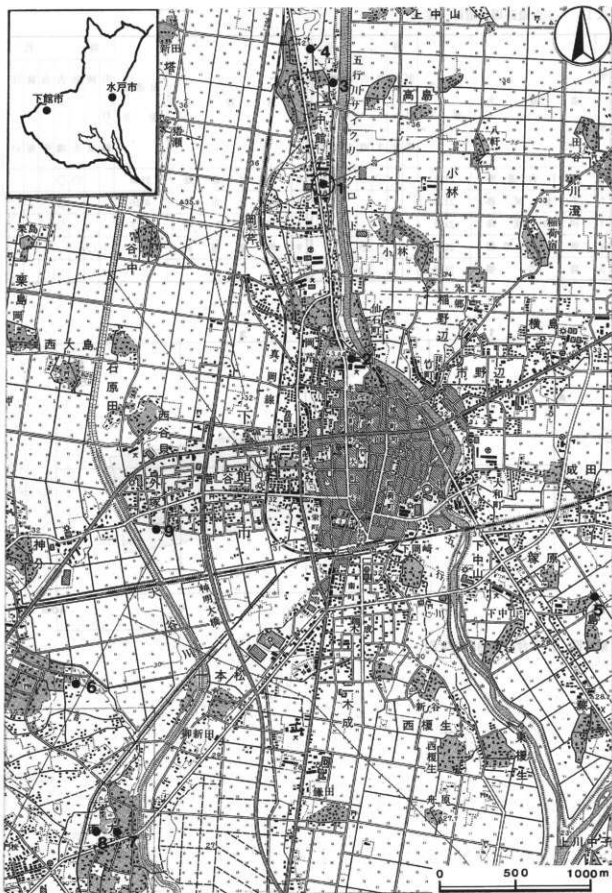
- ・茨城県 【茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代】 1979年3月  
・茨城県 【茨城県史料 考古資料編 古墳時代】 1974年3月  
・茨城県 【茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代】 1995年3月  
・茨城県 【茨城県史 市町村編Ⅱ】 1975年3月

表1 八丁台遺跡周辺遺跡一覧表

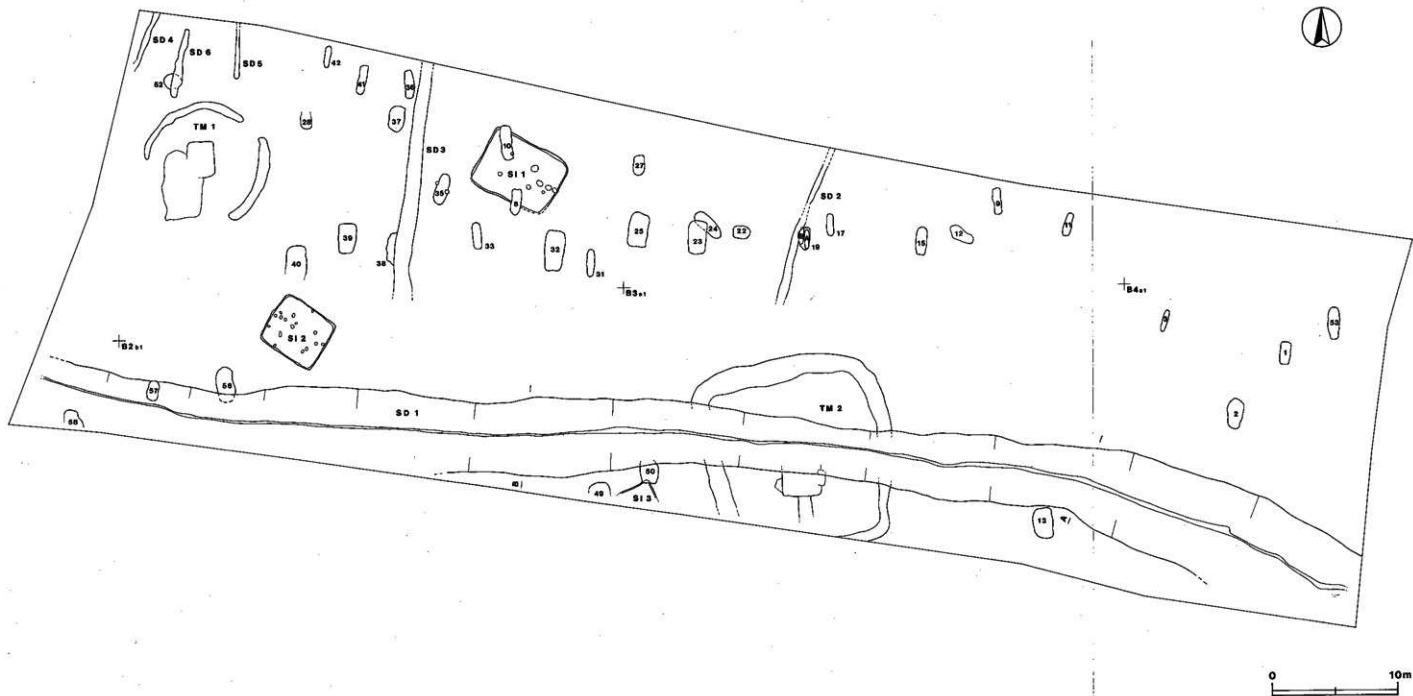
番 号	遺 跡 名	界遺跡 番 号	時 代					番 号	遺 跡 名	界遺跡 番 号	時 代						
			旧	縄	弥	古	奈				江	旧	縄	弥	古	奈	江
			石	文	生	墳	平				座	戸	器	文	生	墳	平
①	八丁台遺跡	2181		○	○	○		6	元村遺跡	2180		○	○				
2	下館城跡	2171				○	○	7	西方古墳	4016			○				
3	伊佐城跡	2172				○		8	西方新知古墳	4017			○				
4	富士東古墳群	2177			○			9	外塚遺跡	5877		○					
5	烏古墳	2179			○												



第2図 八丁台遺跡地区設定図



第3図 周辺遺跡分布図



第4図 八丁台遺跡遺構全体図

## 第3章 遺跡

### 第1節 遺跡の概要

八丁台遺跡は、下館駅から北に直線で約2.5kmの中館地区に所在している。五行川左岸の標高44.0～45.2mの台地上にあり、弥生時代、古墳時代および中世の複合遺跡である。現況は、宅地及び雑種地で、調査面積は3,334㎡である。

今回の調査によって、弥生時代の竪穴住居跡3軒、古墳2基、平安時代の土坑2基、中世の竪1条を確認した。その他に時期不明の土坑35基、溝5条が確認されている。

遺物は、遺物収納箱（60×40×20cm）に13箱出土している。縄文時代の出土遺物は、前期の黒浜式土器及び石鏃である。弥生時代の出土遺物は、弥生土器（壺）、土製品（紡錘車）、ガラス製品（小玉）である。古墳時代の出土遺物は、須恵器（広口壺）、鉄製品（刀子）である。中世の出土遺物は、陶器（甕）、土師質土器（小皿）等が出土している。

### 第2節 基本層序

調査区内にテストピットを設定し、第5図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は、12～20cmの厚さの耕作土層で、褐色をしている。

第2層は、28～34cmの厚さで、褐色のソフトローム層である。

第3層は、11～20cmの厚さで、明黄褐色のハードローム層である。

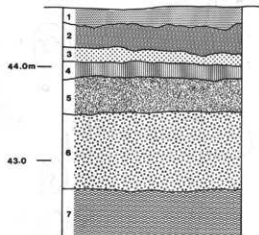
第4層は、12～24cmの厚さで、にぶい黄褐色のハードローム層であり、粘性・締まりとも強い。

第5層は、32～40cmの厚さで、鹿沼バミス層への漸移層である。第4層と鹿沼バミスの混合層で、鈍い黄褐色である。

第6層は、75～85cmの厚さで、にぶい黄橙色の鹿沼バミス層である。

第7層は、黄褐色の粘土層である。

八丁台遺跡の遺構は、第1層下層から確認されている。



第5図 基本土層図



### 第3節 遺構と遺物

#### 1 竪穴住居跡

今回の調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡3軒を検出した。以下、検出した遺構と遺物について記載する。

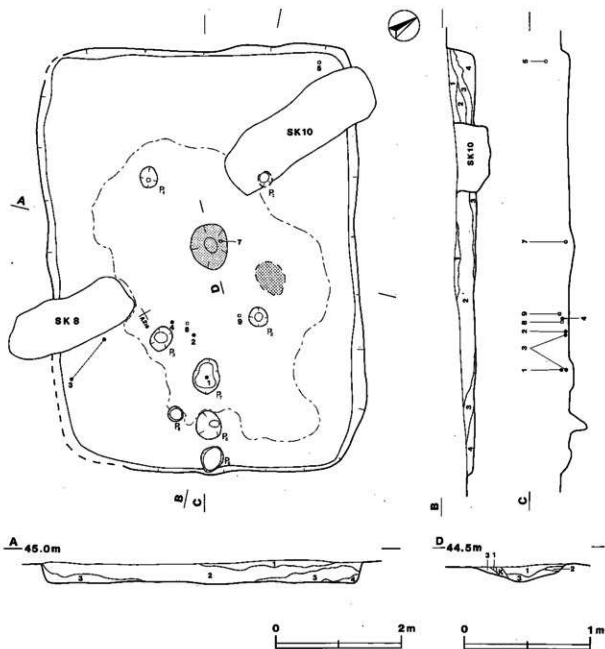
##### 第1号住居跡（第6図）

位置 調査区西部，A2hs区。

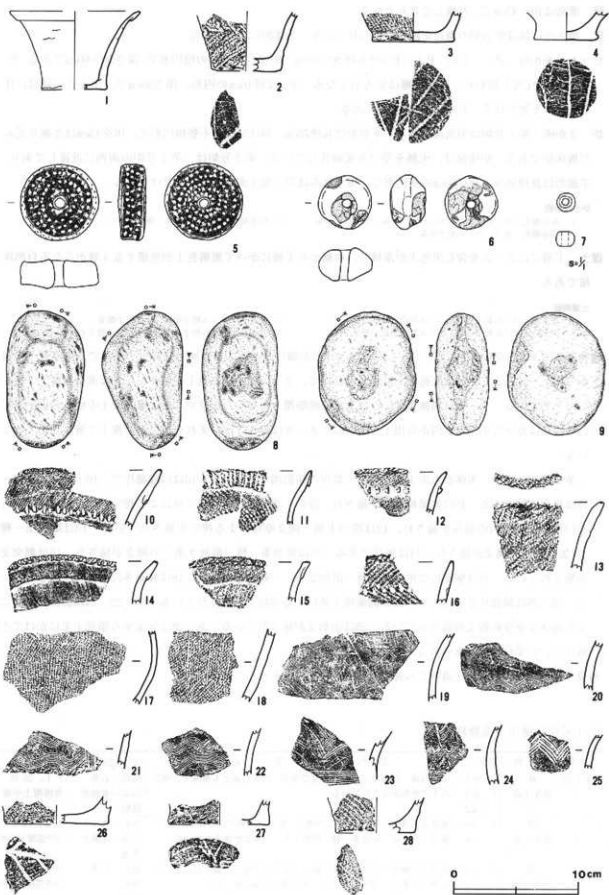
重複関係 本跡は，第8・10号土坑に掘り込まれており，これらの土坑より古い。

規模と平面形 長軸6.76m，短軸4.93mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-62°-W



第6図 第1号住居跡



第7图 第1号住居跡出土遺物

壁 壁高は10~35cmで、外傾して立ち上がる。

床 出入り口施設から炉の周辺が踏み固められている。全体的に平坦である。

ピット 8か所 (P1~P8)。P1~P4は長径26~57cm、短径24~33cmの楕円形で、深さ50~90cmである。P1~P4は支柱穴と思われ、結んだ線は長方形となる。P5は径46cmの円形、深さ30cmで、出入り口施設に伴うピットと思われる。P6~P8は不明である。

炉 2か所。第1号炉は中央部にあり、平面形は長径75cm、短径59cmの不整楕円形で、床を13cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床面は、火熱を受け赤変硬化している。第2号炉は、第1号炉の南西に近接してあり、平面形は長径58cm、短径40cmの楕円形で、掘り込みはなく焼土が検出されただけである。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック中量、炭化粒子少量      3 暗赤褐色 焼土粒子多量・焼土小ブロック中量  
2 暗赤褐色 焼土・ローム粒子少量

覆土 上層にはロームを含む黒色土が堆積し、中層から下層にかけて黒褐色土が堆積する4層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子中量、バミス状白色粒子少量      3 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量  
2 黒褐色 ローム粒子中量、バミス状白色粒子微量      4 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・焼土小ブロック微量

遺物 弥生土器片590点が出土しているが、ほとんどが細片である。第7図1は弥生土器鉢で、南部覆土中層から出土している。2~4は弥生土器壺の底部片で、2・4は中央部覆土下層から、3は南西部覆土下層から出土している。5・6は紡錘車で、5は北東部壁際覆土中層から正位で、6は東部覆土中層から出土している。7はガラス小玉で炉内から出土している。8・9は鯨石で、いずれも中央部の覆土下層から出土している。

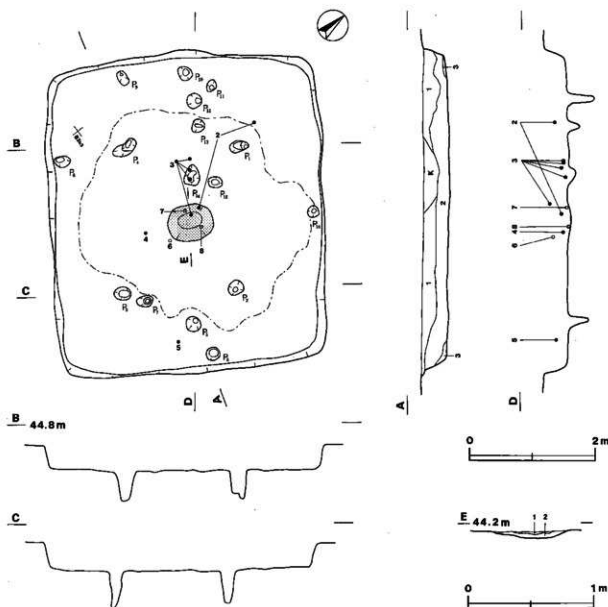
第7図10~28は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。10~16は口縁部片で、10・11・12・14・15は複合口縁である。10は無節縄文Lが施され、段の下端には、ヘラ状工具による押圧がなされている。11は口縁部に縦方向の刻みが施され、12は段の下端に縄文原体による押圧が施されている。13は附加条一種(附加2条)の縄文が施され、14は無文である。15は附加条一種(附加2条)の縄文が施され、16は刺突文が施されている。17は胴部片で附加条一種(附加2条)の縄文が施され、18は異条多段の縄文が施されている。19~25は頸部片で、19・20・22は櫛歯状工具による波状文が施されている。21・23・24は櫛歯状工具による波状文及び直線文が施されている。25は山形文が施されている。26~28は底部から胴部下半にかけての破片で、いずれも木葉痕がある。

所見 本跡の時期は、出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	許測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第7図 1	鉢 弥生土器	A (10.4)	二重口縁。底部は、平底で無文である。内・外面とも無文で、横位のナデ整形がなされている。	長石・石英 にぶい黄褐色	P 1, 25 % 南部覆土中層 良好
		B 6.3			
		C (5.2)			
2	壺 弥生土器	B (4.6)	底部から胴部下半にかけての破片。底部は平底で、木葉痕がある。胴部下半には、附加条一種(附加1条)の縄文が施されている。	長石・スコリア にぶい赤褐色 普通	P 2, 10 % 中央部覆土下層
		C (5.6)			
3	壺 弥生土器	B (2.3)	底部から胴部下半にかけての破片。底部は平底で、張り出しを持ち、木葉痕がある。胴部下半には、単節縄文が施されている。	長石・石英 褐色 普通	P 3, 10 % 南西部覆土下層
		C 6.6			





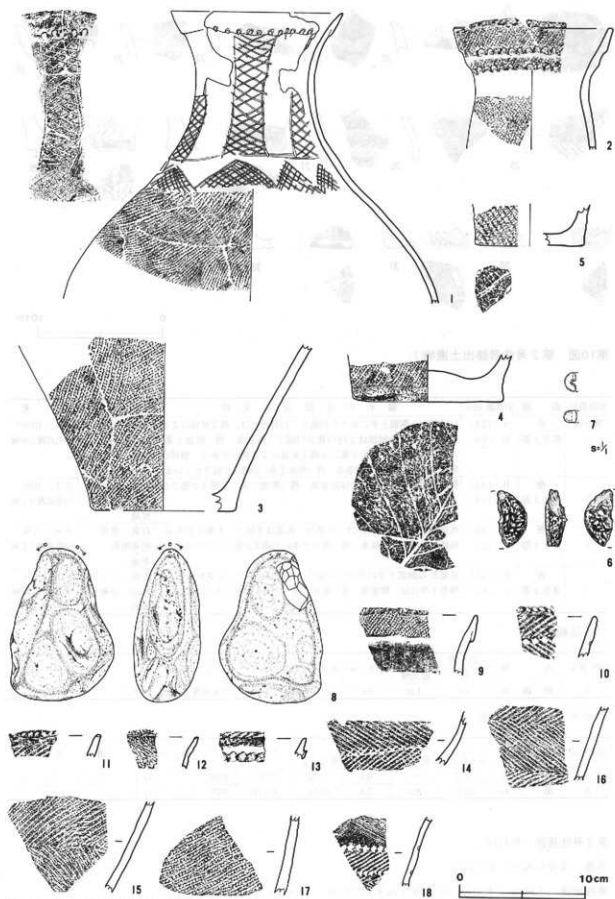
第8図 第2号住跡

厨部片である。14~16は附加条一種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとる。17は附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。18~23・25~27は頸部片である。18は縄文原体による刺突がなされ、19~21は鋸歯状工具による波状文が施されている。22・25は連弧文が施され、23・26は山形文が施され、27は4本櫛歯による直線文が施されている。28~33は底部から厨部下半にかけての破片で、28・29・31~33は底部に木炭痕、30は布目痕がある。

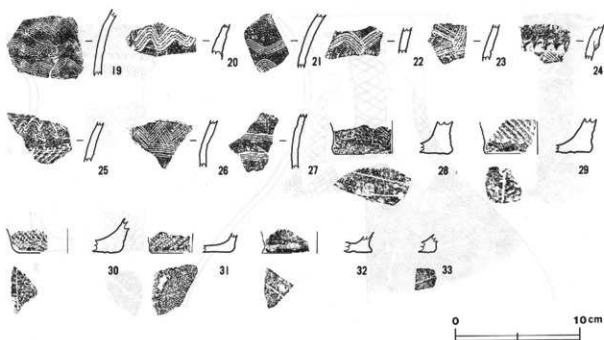
所見 本跡の時期は、出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第9図 1	壺 弥生土器	A (13.6) B (23.0)	口縁部から厨部上半にかけての破片。口縁部は複合口縁で、段の下端には縄文原体による押圧がある。腹部は、ヘラ状工具により縦位に分割され、幅の狭い区画内には、格子状文が施されている。厨部には、附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。	長石・石英・パミス 明赤褐色 普通	P 5, 50% 中央部埋土中層



第9图 第2号住居跡出土遺物(1)



第10図 第2号住居跡出土遺物(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第9図 2	壺 弥生土器	A [12.8]	口縁部から胴部上半にかけての破片。口唇部には、縄文原体による押圧がある。口縁部は2段の複合口縁で、附加条一種(附加2条)の縄文が施され、段の下縁には縄文原体による押圧がある。頸部は無文である。胴部には附加条一種(附加2条)の縄文が施されている。	長石・石英 明赤褐色 普通	P 6, 10% 中央部覆土中層
		B (9.8)			
3	壺 弥生土器	B (13.4)	胴部下半の破片。胴部には附加条一種(附加2条)の縄文が施されている。	石英・スコリア 橙色 普通	P 7, 10% 中央部覆土F層
		C [11.8]			
4	壺 弥生土器	B (3.8)	底部から胴部下半にかけての破片。底部は平底で、木葉痕がある。胴部下半には、附加条一種(附加2条)の縄文が施されている。	石英・雲母 明赤褐色 普通	P 8, 5% 中央部覆土下層
		C 12.1			
5	壺 弥生土器	B (3.4)	底部から胴部下半にかけての破片。底部は平底で、木葉痕がある。胴部下半には、附加条一種(附加2条)の縄文が施されている。	雲母・バミス にぶい赤褐色 普通	P 9, 5% 南部覆土中層
		C [8.7]			

土製品観察表

図版番号	器種	計測値(cm)		孔径(cm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		径	最大厚					
6	紡錘車	(4.6)	(1.8)	(0.6)	(145)	30	中央部覆土中層	D P 3

ガラス・石製品観察表

図版番号	器種	計測値(cm)				石質	出土地点	備考
		最大長(径)	最大幅	最大厚	重量(g)			
7	小玉	0.3	-	0.4	(0.2)	ガラス	炉内	Q 4
8	敷石	12.1	8.3	5.4	682.6	安山岩	炉内	Q 5

第3号住居跡(第11図)

位置 調査区西部, B 3 e1区。

重複関係 本跡は、第50号土坑に掘り込まれており、第50号土坑より古い。

規模と平面形 長軸(2.35)m、短軸(1.44)mであるが、南部が調査区域外であるため正確な平面形は不明

である。

壁 壁高は16~18cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦である。

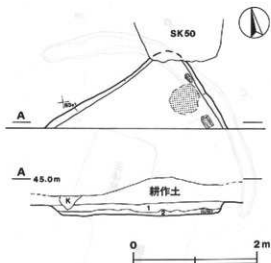
覆土 2層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量、炭化粒子微量  
2 暗褐色 ローム粒子・炭化物少量

遺物 弥生土器片が少量出土しているが、ほとんど細片である。第12図1・2は弥生土器胴部片の拓影図である。いずれも附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。

所見 本跡は、床面から炭化材と焼土の広がりを検出した。南部が調査区域外に延びており、遺構の全体は捉えられなかったが、何らかの理由により焼失したものと思われる。本跡の時期は、出土遺物が極わずかであるため明確ではないが、出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。



第11図 第3号住居跡



第12図 第3号住居跡出土遺物

表2 八丁台遺跡住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長短×短)	壁高	床面	内部施設			出入口 ビット	如	覆土	出土遺物	備考 *遺物部(番-印) 本跡	
							壁溝	柱穴	貯蔵穴						
1	A2h	N-62°W	隅丸長方形	6.76×4.93	10~35	平坦	-	4	-	3	1	2	自然	弥生土器片、紡錘車、 ガラス小玉、敲石	SK-8・10→ 本跡
2	B2aa	N-56°W	隅丸長方形	5.19×4.40	32~44	平坦	-	4	-	11	1	1	自然	弥生土器片、紡錘車、 ガラス小玉、敲石	
3	B3ea	-	-	(2.35×1.44)	16~18	平坦	-	-	-	-	-	-	自然	弥生土器片	SK-50→本跡

## 2 古墳

当遺跡からは、調査区西部で円墳が1基、中央部で方墳が1基の計2基が検出されている。以下、検出した遺構及び遺物について記載する。

### 第1号墳（第13図）

現況と確認状況 調査前までは雑種地であった。事前調査の段階では、墳丘が既に失われていたため、全くその存在は不明であった。古墳は、試掘、表土除去、遺構確認の一連の調査過程で周溝が確認され、始めてその存在が明らかになった。

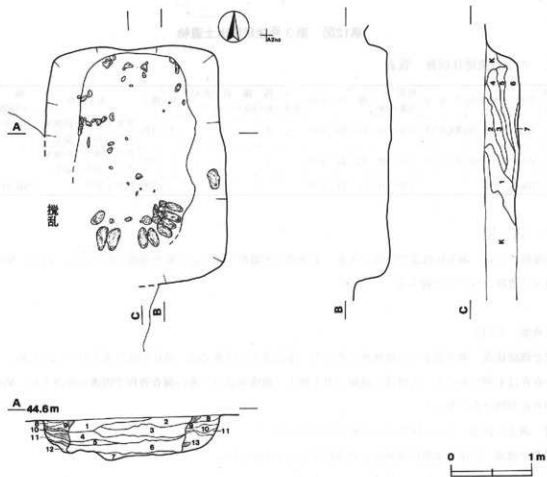
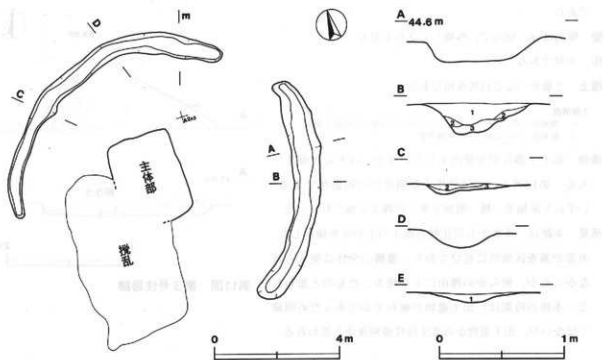
位置 調査区西部、A2h2区を中心に検出されている。

墳形及び規模 円墳。本墳の規模は、周溝内径で約10.1mである。

墳丘 墳丘は削平されていて、封土の状況は不明である。

周溝 円形に巡るが、南西部は攪乱されており明確な周溝は確認できなかった。確認面における規模は、上幅





第13图 第1号墳

0.7~1.4m, 下幅0.4~0.8m, 深さ0.1~0.3mで, 緩やかに立ち上がっている。覆土は3層からなる自然堆積である。

周溝土層解説

- |   |      |                     |   |    |                   |
|---|------|---------------------|---|----|-------------------|
| 1 | 黒褐色  | ローム粒子少量, 粘土粒子極少量    | 3 | 褐色 | ローム中・小ブロック・暗褐色土中量 |
| 2 | 暗赤褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量 |   |    |                   |

埋葬施設 埋葬施設は, 中央部から検出され, 南部から西部にかけては攪乱を受けており, 羨道と思われる施設は確認できなかったが, 河原石小口積みによる横穴式石室と思われる。主軸方向はN-1°-Wを指している。掘り方は, 長軸3.5m, 短軸2.5mの隅丸長方形で, 深さ0.5mである。天井石及び御石の石材が遺存しないため, 石室の高さは確認できないが, 確認面から0.4mほどである。壁は, ローム土で硬く明瞭で, 緩やかに外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

横穴式石室土層解説

- |    |      |   |
|----|------|---|
| 1  | 黒褐色  | ローム中・小ブロック・白色粘土小ブロック中量, 白色粘土中ブロック・ローム粒子少量       |
| 2  | 黒暗褐色 | ローム中・小ブロック中量, 白色粘土中・小ブロック・粘土・炭化粒子少量, ローム粒子微量    |
| 3  | 暗褐色  | ローム中・小ブロック中量, 白色粘土中・小ブロック・粘土・ローム・炭化粒子少量         |
| 4  | 暗褐色  | ローム中・小ブロック中量, 白色粘土中・小ブロック・粘土・ローム粒子少量            |
| 5  | 暗褐色  | 白色粘土小ブロック・粘土粒子中量, ローム中・小ブロック・粘土小ブロック・ローム・炭化粒子少量 |
| 6  | 黄褐色  | ローム中・小ブロック中量, 白色粘土中・小ブロック・粘土・ローム・炭化粒子少量         |
| 7  | 褐色   | ローム小ブロック・白色粘土中・小ブロック・粘土・炭化粒子少量, ローム粒子微量         |
| 8  | 褐色   | 粘土粒子多量, ローム中ブロック中量, 白色粘土中・小ブロック・ローム・炭化粒子少量      |
| 9  | 褐色   | ローム中・小ブロック多量, 粘土・ローム粒子少量                        |
| 10 | 褐色   | ローム中・小ブロック中量, 粘土・ローム粒子少量                        |
| 11 | 黒褐色  | 白色粘土中ブロック・白色粘土・ローム粒子少量                          |
| 12 | 褐色   | 白色粘土大・中ブロック中量, 白色粘土粒子少量                         |
| 13 | 褐色   | 白色粘土大・中ブロック中量, 白色粘土粒子少量, ローム粒子微量                |

遺物 主体部から, 第16図1の土製管玉が出土している。

所見 本跡に伴う遺物は, 土製管玉だけで, 時期を推定するのは難しいが, 主体部の形態などから, 古墳時代後期(7世紀代)と思われる。

第2号墳(第14・15図)

現況と確認状況 調査前までは, 宅地であり墳丘は既に失われ, 全くその存在は不明であった。古墳は, 表土除去, 遺構確認で周溝が確認され, 始めてその存在が明らかになった。

位置 調査区中央部, B3c区を中心に検出されている。

重複関係 本跡は, 第1号堀に掘り込まれており, 本跡の方が古い。

墳形及び規模 方墳。本跡の規模は, 周溝内側で一辺(7.4)mである。

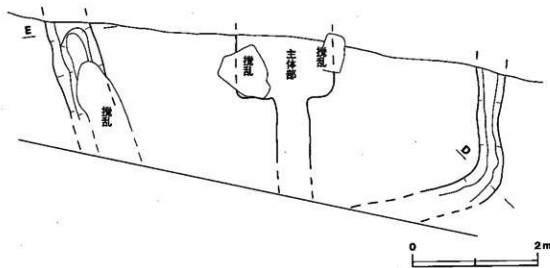
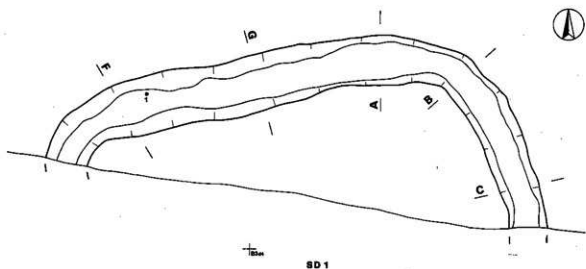
墳丘 墳丘は削平されていて, 封土の状況は不明である。

周溝 方形に巡るが, 東西に延びる第1号堀によって東部及び西部の一部が壊されている。確認面における規模は, 上幅0.3~0.9m, 下幅0.2~0.6m, 深さ0.2~0.4mで, 緩やかに立ち上がる。南部から北部にかけて傾斜しており, 北部は覆土の一部が削平されている。北東部(A-A', B-B', C-C'), 西部(E-E')で3~4層, 南東部(D-D')は黒褐色土主体の5層からなる自然堆積である。

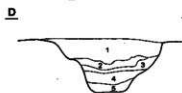
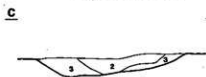
周溝土層解説

- |                    |     |                           |   |     |                     |
|--------------------|-----|---------------------------|---|-----|---------------------|
| (A-A', B-B', C-C') |     | (D-D')                    |   |     |                     |
| 1                  | 黒褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック微量       | 1 | 黒褐色 | ローム粒子中量             |
| 2                  | 黒褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック・ローム粒子微量 | 2 | 黒褐色 | ローム粒子少量             |
| 3                  | 褐色  | ローム粒子少量                   | 3 | 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量    |
| 4                  | 褐色  | ローム粒子微量                   | 4 | 黒褐色 | ローム粒子多量             |
|                    |     |                           | 5 | 黒褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量 |

埋葬施設 埋葬施設は, 中央部で確認され, 河原石小口積みによる横穴式石室である。石室の北部は第1号堀に掘り込まれ, 東部及び南西部の裏込め部は攪乱を受けている。掘り方は, 長軸(2.8)m, 短軸3.3mの隅



A 44.8m



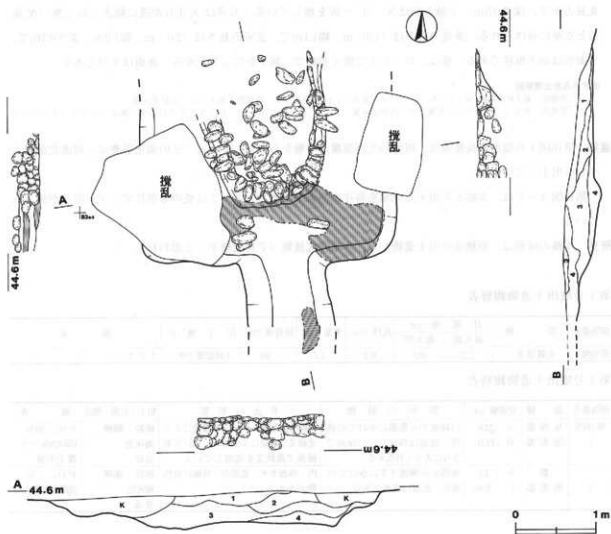
E 44.8m



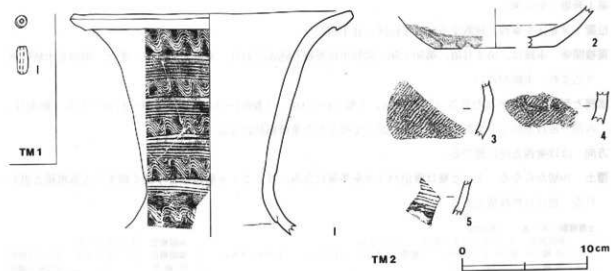
G 44.8m



第14图 第2号墳(1)



第15图 第2号墳(2)



第16图 第1・2号墳出土遺物

九長方形で、深さ0.5m、主軸方向はN-3°-Wを指している。石室は天井石が既に除去されて無いが、羨道と玄室に分けられる。羨道の長さは(1.9)m、幅1.1mで、玄室の長さは(2.0)m、幅1.2m、深さ0.3mで、平面形は羽子板状である。壁は、ローム土で硬く明瞭で、緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

#### 横穴式石室土層解説

- 1 黒褐色 粘土粒子多量、粘土小ブロック・ローム・鹿沼バミス粒子中量 3 黒褐色 粘土・ローム粒子少量  
2 黒褐色 粘土大・中ブロック多量、ローム粒子少量 4 におね粘土大・中ブロック・鹿沼バミス中・小ブロック少量

遺物 第16図1の須恵器長頸壺は、周溝の北西部覆土中層から出土している。2の須恵器甕は、周溝北部覆土中から出土している。

第16図3～5は、本跡から出土した須恵器片の拓影図である。3～5は甕の体部片で、平行明きが施されている。

所見 本跡の時期は、形態及び出土遺物から、古墳時代後期(7世紀後半)と思われる。

#### 第1号墳出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)		孔径(cm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大径					
第16図1	土製管玉	(2.2)	0.9	0.2	(1.7)	90	主体部覆土中	D P 4

#### 第2号墳出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第16図1	長頸壺	A 22.8 B (17.9)	口縁部から頸部にかけての破片。頸部は外反し、口縁部でさらに大きく外反する。	口縁部内面横ナテ。7本舞曲による沈線文で横位に5分割し、中に5本舞曲で波状文を充填している。	砂粒・細礫 褐灰色 良好	P10, 30% 周溝北西部コーナー覆土中層
2	甕 須恵器	B (3.2) C (9.6)	底部から胴部下半にかけての破片。底部は平底である。	内・外面ナテ。底部内・外面に自然釉がかかる。	砂粒・細礫 褐灰色 普通	P11, 5% 周溝北部覆土中

### 3 堀

当遺跡からは、城館跡に伴う堀1条を検出した。以下、検出した遺構と遺物について記載する。

#### 第1号堀(第4図)

位置 調査区を東西に横断する、B1b区～B4f区。

重複関係 本跡は、第2号墳、第50・56・57号土坑を掘り込んでおり、本跡が新しい。また、第58号土坑に掘り込まれ、本跡が古い。

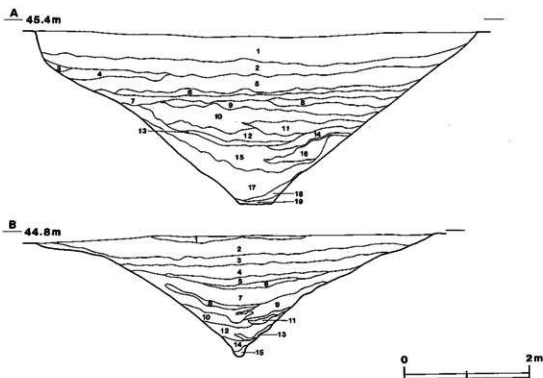
規模と形状 確認された長さ(105.6)m、上幅4.5～7.1m、下幅0.1～0.4m、深さ1.9～2.7mである。断面は、西部で逆台形状で、東部に進むにしたがって緩やかな薬研槽状になる。

方向 ほぼ東西方向に延びる。

覆土 19層からなる。1・2層は鹿沼バミスを多量に含み、6・7・8層はかなり硬く締まり人為堆積と思われる。他は自然堆積である。

#### 土層解説(A-A')(第17図)

- 1 極暗褐色 ローム粒子中量、鹿沼バミス粒子少量 4 極暗褐色 ローム粒子少量  
2 暗褐色 鹿沼バミス小ブロック・鹿沼バミス・ローム粒子・ローム小ブロック多量 5 極暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量  
3 黒褐色 ローム粒子中量 6 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量  
7 黒褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量



第17図 第1号堀土層

- |        |                    |        |                               |
|--------|--------------------|--------|-------------------------------|
| 8 黒褐色  | ローム粒子中量, 炭化粒子微量    | 15 黒褐色 | ローム粒子多量, 塵沼パミス粒子少量            |
| 9 黒褐色  | ローム粒子少量, 炭化粒子微量    | 16 黒褐色 | ローム粒子多量                       |
| 10 黒褐色 | ローム・炭化粒子少量         | 17 暗褐色 | ローム粒子多量, 塵沼パミス小ブロック・塵沼パミス粒子中量 |
| 11 暗褐色 | ローム粒子中量, 塵沼パミス粒子少量 | 18 暗褐色 | ローム・塵沼パミス粒子少量                 |
| 12 黒褐色 | ローム・塵沼パミス粒子少量      | 19 褐色  | 塵沼パミス中ブロック・粘土多量               |
| 13 暗褐色 | ローム・塵沼パミス粒子少量      |        |                               |
| 14 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量   |        |                               |

土層断面 (B-B') (第17図)

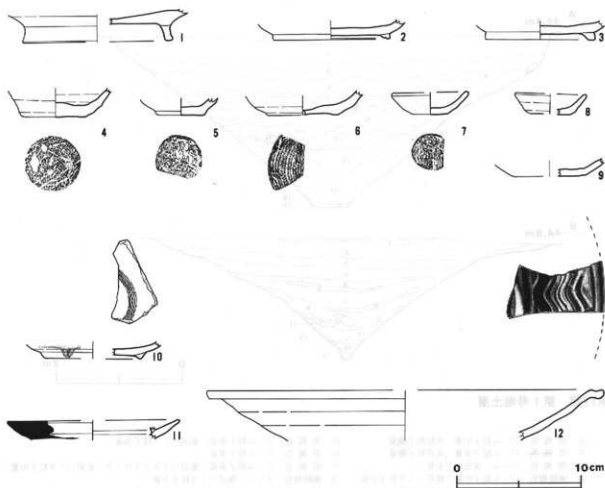
- |       |                          |        |                               |
|-------|--------------------------|--------|-------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子多量, 塵沼パミス粒子少量       | 8 黒褐色  | ローム粒子中量, 炭化粒子微量               |
| 2 暗褐色 | 塵沼パミス小ブロック・ローム・塵沼パミス粒子多量 | 9 黒褐色  | ローム粒子少量, 炭化粒子微量               |
| 3 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子微量         | 10 黒褐色 | ローム粒子少量, 塵沼パミス粒子微量            |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量                  | 11 黒褐色 | ローム・塵沼パミス粒子少量                 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量          | 12 暗褐色 | ローム・塵沼パミス粒子少量                 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子中量                  | 13 暗褐色 | ローム粒子多量, 塵沼パミス小ブロック・塵沼パミス粒子中量 |
| 7 黒褐色 | ローム小ブロック少量               | 14 暗褐色 | ローム・塵沼パミス粒子少量                 |
|       |                          | 15 褐色  | 塵沼パミス中ブロック・粘土多量               |

遺物 覆土中から土師質土器(皿)6点, 陶器3点, 流れ込みと思われる縄文土器片1点, 弥生土器片264点, 須恵器片62点, 土師器片140点が出土している。第18図1~3は須恵器高台付坏で, いずれも流れ込みと思われる。4~9は土師質土器の皿で覆土下層から出土している。10の陶器(小皿), 11の陶器(灯明皿), 12の陶器(大鉢)は覆土上層から出土している。

所見 本跡は, 本跡から北約0.8kmほどに伊佐城跡, 南約1.1kmほどに下館城跡があり, その中間に位置している。本跡の時期は, 出土遺物から中世と思われる。

第1号堀出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 1	高台付坏 須恵器	B (2.2) D (11.8) E 1.3	底部片。平底。高台はハの字状に開く。	底部回転ヘラ削り調整。	灰石・石英 灰色 普通	P13, 40% 覆土中



第18図 第1号堀出土遺物

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 2	高台付坏 須臾器	B (1.5) D 9.4 E 0.5	底部片。平底。高台は短い。	底部回転ヘラ削り調整。	長石・石英 灰色 普通	P14, 20% 覆土中
3	高台付坏 須臾器	B (1.5) D 8.8 E 0.6	底部片。平底。高台は低い。	底部回転ヘラ削り調整。	長石 灰色 普通	P15, 10% 覆土中
4	皿 土師質土器	B (2.3) C 5.1	底部から体部にかけての破片。 底部は平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部回転糸切り。	長石・スコリア 浅黄褐色 普通	P16, 30% 覆土下層
5	皿 土師質土器	B (1.4) C 3.8	底部から体部にかけての破片。 底部は平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部回転糸切り。	砂粒・スコリア 灰白色 普通	P17, 20% 覆土下層
6	皿 土師質土器	B (1.6) C [5.8]	底部から体部にかけての破片。 底部は平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部回転糸切り。	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	P18, 20% 覆土下層
7	皿 土師質土器	A [6.2] B 1.8 C 2.9	底部から口縁部にかけての破片。 底部は平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	底部回転糸切り。	砂粒・スコリア 灰白色 普通	P19, 30% 覆土下層
8	皿 土師質土器	A [5.8] B 1.7 C [3.4]	底部から口縁部にかけての破片。 底部は平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	底部回転糸切り。	砂粒 灰白色 普通	P20, 30% 覆土下層
9	皿 土師質土器	B (1.3) C [5.8]	底部から体部にかけての破片。 底部は平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	底部回転糸切り。	砂粒・スコリア 灰白色 普通	P21, 20% 覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
10	小皿 陶器	B (14) C (7.9)	底部片。平底。高台は低い。	内・外面に軸がかかる。	胎土：灰褐色 軸：草色 良好	P22, 30% 覆土上層 肥前系
11	灯明皿 陶器	A (13.8) B (1.5)	体部片。体部は外傾して立ち上がる。	内・外面に軸がかかる。	胎土：褐灰色 軸：透明 良好	P23, 20% 覆土上層 内面煤付者
12	大鉢 陶器	A (32.0) B (4.0)	体部は緩やかに立ち上がる。	内・外面に軸がかかる。	胎土：暗赤褐色 軸：オリーブ褐色 良好	P24, 5% 覆土上層 肥前系

#### 4 土坑

調査当初、土坑として番号を付したものは59基であった。調査及び整理の段階で、複乱・木の根と判断し欠番としたものがあり、最終的な土坑の数は37基である。ここでは、時期が推定できる2基について記述し、他は一覧表に記載した。

##### 第10号土坑 (第19図)

位置 調査区西部, A 2hs区。

重複関係 本跡は、第1号住居跡を掘り込んでおり、本跡の方が新しい。

規模と平面形 長軸2.72m, 短軸0.88mの長方形で、深さ52cmである。

長軸方向 N-3°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 7層からなる人為堆積である。

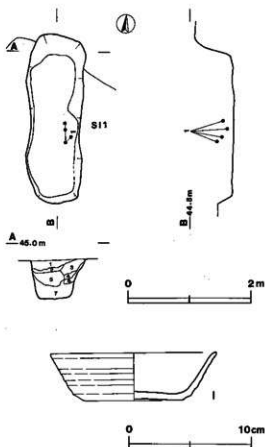
##### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ローム中ブロック中量, ローム粒子少量
- 7 褐色 ローム粒子中量

遺物 須恵器環1点, 弥生土器片30点が出土している。

第19図1は須恵器環で、中央部覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から9世紀前葉と思われる。性格は不明である。



第19図 第10号土坑・出土遺物

##### 第10号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19図 1	環 須恵器	A 13.6 B 3.9 C 8.0	口縁部一部欠損。平底。体部は直線的に外傾し、口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部ロクロナデ。底部回転ヘラ削り調整。	灰石・石英 褐灰色 普通	P25, 90% 中央部覆土下層



第42号土坑（第20図）

位置 調査区西部、A 2 6区。

規模と平面形 長軸1.66m、短軸0.47mの隅丸長方形で、深さ17cmである。

長軸方向 N - 6° - E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

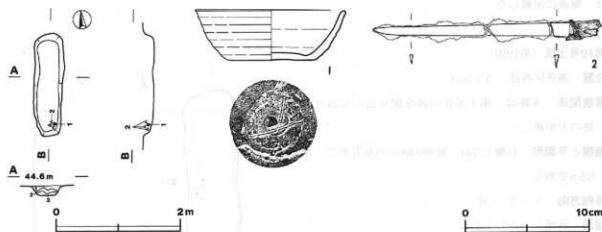
覆土 3層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、黒色土小ブロック少量 3 褐色 ローム粒子少量  
2 暗褐色 ローム粒子中量

遺物 第20図1は須恵器環，2は刀子でいずれも南部覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から9世紀前半と思われる。性格は不明である。



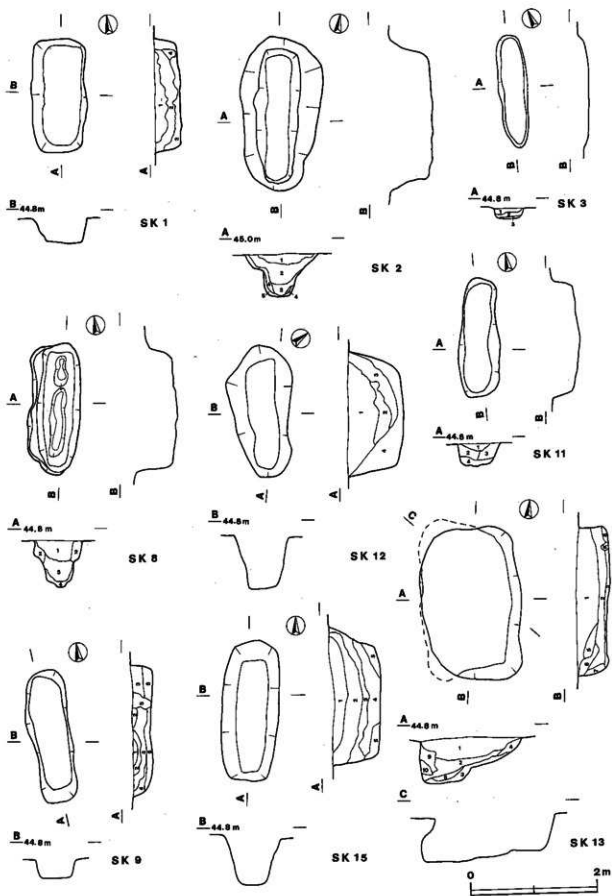
第20図 第42号土坑・出土遺物

第42号土坑出土遺物観察表

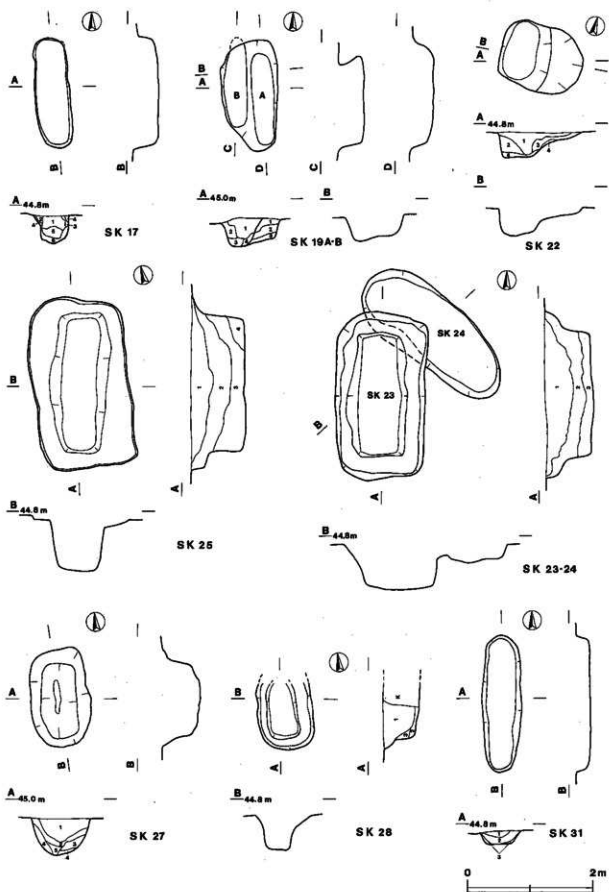
図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第20図 1	環 須恵器	A 12.2 B 4.0 C 7.1	体部一部欠損。平底。体部はわずかに内傾しながら外傾し、口縁部は外反する。	口縁部・体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、ナデ調整。	長石・石英・金雲母 黄灰色 普通	P 26、90% 南部覆土下層 底部外面ヘラ記号 底部外面墨書

鉄製品観察表

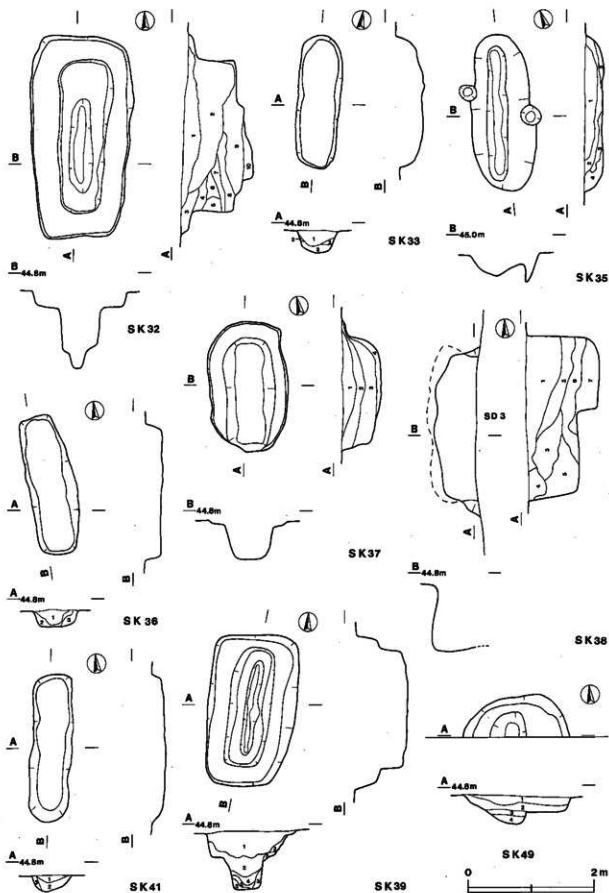
図版番号	器種	計測値 (cm)				出土地点	備考
		長さ	幅	厚さ	重量 (g)		
2	刀子	(18.4)	(1.2)	(0.3)	(19.9)	南部覆土下層	M 7



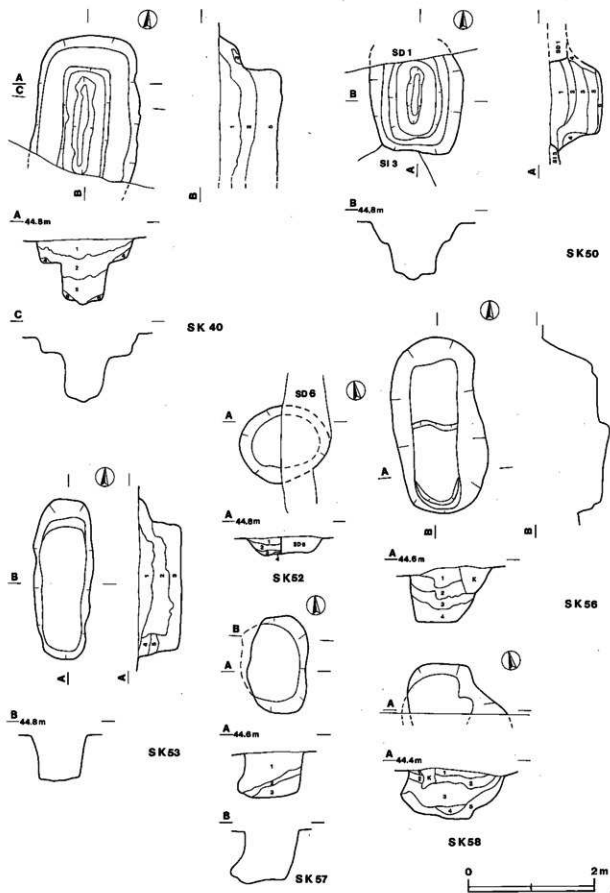
第21圖 土坑(1)



第22圖 土坑(2)



第23圖 土坑(3)



第24圖 土坑(4)

第1号土壌層解説 (第21図)

- 1 黒褐色 ロ-ム粒子少量
- 2 暗褐色 ロ-ム粒子中量
- 3 暗褐色 ロ-ム中ブロック・黒色土大ブロック多量
- 4 暗褐色 ロ-ム粒子少量

第2号土壌層解説 (第21図)

- 1 褐色 ロ-ム中・小ブロック多量
- 2 暗褐色 ロ-ム粒子少量
- 3 暗褐色 ロ-ム粒子多量、ロ-ム小ブロック中量
- 4 暗褐色 ロ-ム大ブロック少量
- 5 暗褐色 ロ-ム小ブロック・ロ-ム粒子少量

第3号土壌層解説 (第21図)

- 1 暗褐色 ロ-ム粒子中量、黒色土小ブロック少量
- 2 暗褐色 ロ-ム粒子中量、黒色土小ブロック少量
- 3 褐色 ロ-ム粒子多量、ロ-ム小ブロック少量

第8号土壌層解説 (第21図)

- 1 暗褐色 ロ-ム粒子少量
- 2 暗褐色 ロ-ム粒子中量
- 3 暗褐色 ロ-ム粒子中量、ロ-ム小ブロック少量
- 4 褐色 ロ-ム粒子多量、ロ-ム中・小ブロック少量

第9号土壌層解説 (第21図)

- 1 暗褐色 ロ-ム粒子多量
- 2 黒褐色 ロ-ム粒子中量
- 3 暗褐色 ロ-ム中・小ブロック・ロ-ム粒子多量
- 4 黒褐色 ロ-ム粒子少量
- 5 暗褐色 ロ-ム小ブロック・ロ-ム粒子中量
- 6 褐色 ロ-ム粒子微量

第11号土壌層解説 (第21図)

- 1 暗褐色 ロ-ム粒子少量
- 2 暗褐色 ロ-ム中・小ブロック・ロ-ム粒子中量
- 3 暗褐色 ロ-ム中・小ブロック、ロ-ム中・小ブロック少量
- 4 暗褐色 ロ-ム粒子中量

第12号土壌層解説 (第21図)

- 1 黒褐色 ロ-ム・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロ-ム・炭化粒子少量
- 3 褐色 ロ-ム中量
- 4 褐色 ロ-ム中ブロック・ロ-ム粒子少量、炭化粒子微量

第13号土壌層解説 (第21図)

- 1 黒褐色 ロ-ム粒子中量、ロ-ム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ロ-ム小ブロック・ロ-ム粒子少量
- 3 褐色 ロ-ム粒子多量
- 4 褐色 ロ-ム中ブロック・ロ-ム粒子中量
- 5 黒褐色 ロ-ム小ブロック・ロ-ム粒子少量
- 6 褐色 ロ-ム粒子多量
- 7 褐色 ロ-ム小ブロック・ロ-ム粒子多量
- 8 褐色 ロ-ム中ブロック・ロ-ム粒子中量
- 9 褐色 ロ-ム粒子少量
- 10 褐色 ロ-ム粒子中量

第15号土壌層解説 (第21図)

- 1 暗褐色 ロ-ム・白色粒子中量
- 2 暗褐色 ロ-ム粒子多量、ロ-ム中・小ブロック少量
- 3 暗褐色 ロ-ム中ブロック・ロ-ム粒子多量
- 4 暗褐色 ロ-ム粒子中量
- 5 暗褐色 ロ-ム中・小ブロック・ロ-ム粒子多量

第17号土壌層解説 (第22図)

- 1 黒色 ロ-ム粒子少量
- 2 黒褐色 ロ-ム小ブロック・ロ-ム粒子微量
- 3 黒褐色 ロ-ム粒子中量
- 4 暗褐色 ロ-ム粒子微量
- 5 極暗褐色 ロ-ム粒子中量、ロ-ム小ブロック微量
- 6 褐色 ロ-ム粒子多量、ロ-ム小ブロック少量

第19号土壌層解説 (第22図)

- 1 黒褐色 ロ-ム・白色粒子微量
- 2 暗褐色 ロ-ム粒子中量、ロ-ム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ロ-ム粒子少量、ロ-ム小ブロック微量

第19B号土壌層解説 (第22図)

- 1 黒褐色 ロ-ム・白色粒子微量
- 2 黒褐色 ロ-ム粒子多量、白色粒子微量
- 3 褐色 ロ-ム粒子多量
- 4 暗褐色 ロ-ム粒子微量

第22号土壌層解説 (第22図)

- 1 黒褐色 ロ-ム粒子中量、白色粒子微量
- 2 暗褐色 ロ-ム粒子中量
- 3 黒褐色 ロ-ム粒子多量、白色粒子微量
- 4 褐色 ロ-ム小ブロック・ロ-ム粒子少量

第23号土壌層解説 (第22図)

- 1 黒褐色 ロ-ム粒子少量
- 2 暗褐色 ロ-ム粒子多量
- 3 暗褐色 ロ-ム大・中ブロック多量

第24号土壌層解説 (第22図)

- 1 黒褐色 ロ-ム粒子少量
- 2 暗褐色 ロ-ム中・小ブロック多量

第25号土壌層解説 (第22図)

- 1 極暗褐色 ロ-ム粒子少量、白色粒子微量
- 2 黒褐色 ロ-ム粒子微量
- 3 黒褐色 ロ-ム粒子中量、ロ-ムブロック少量
- 4 褐色 ロ-ム中・小ブロック中量、ロ-ム粒子少量

第27号土壌層解説 (第22図)

- 1 黒褐色 ロ-ム粒子多量、白色粒子中量
- 2 極暗褐色 ロ-ム粒子多量、ロ-ム小ブロック少量
- 3 褐色 ロ-ム大ブロック少量
- 4 暗褐色 ロ-ム粒子中量
- 5 褐色 ロ-ム粒子中量、ロ-ム小ブロック微量

第28号土壌層解説 (第22図)

- 1 黒褐色 ロ-ム粒子多量、ロ-ム小ブロック・白色粒子少量
- 2 黒褐色 ロ-ム中・小ブロック・ロ-ム粒子少量
- 3 暗褐色 ロ-ム粒子中量

第31号土壌層解説 (第22図)

- 1 暗褐色 ロ-ム粒子中量、ロ-ム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ロ-ム粒子少量
- 3 褐色 ロ-ム粒子多量、ロ-ム小ブロック少量

第32号土壌層解説 (第23図)

- 1 黒褐色 ロ-ム粒子少量、白色粒子微量
- 2 暗褐色 ロ-ム粒子中量
- 3 暗褐色 ロ-ム粒子中量、白色粒子微量
- 4 暗褐色 ロ-ム小ブロック中量、ロ-ム粒子少量、白色粒子微量
- 5 暗褐色 ロ-ム中ブロック中量、ロ-ム粒子少量
- 6 暗褐色 ロ-ム粒子少量
- 7 暗褐色 ロ-ム中・小ブロック少量
- 8 暗褐色 ロ-ム小ブロック少量、ロ-ム粒子微量
- 9 暗褐色 ロ-ム中・小ブロック中量
- 10 褐色 ロ-ム粒子中量

第33号土壌層解説 (第23図)

- 1 黒褐色 ロ-ム粒子微量
- 2 暗褐色 ロ-ム小ブロック・ロ-ム粒子少量
- 3 褐色 ロ-ム粒子中量、ロ-ム小ブロック少量

第35号土壌層解説 (第23図)

- 1 黒褐色 ロ-ム粒子少量、ロ-ム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ロ-ム粒子中量、ロ-ム小ブロック微量
- 3 暗褐色 ロ-ム粒子中量
- 4 褐色 ロ-ム粒子多量

第36号土壌層解説 (第23図)

- 1 黒褐色 ロ-ム・白色粒子少量
- 2 暗褐色 ロ-ム粒子少量
- 3 褐色 ロ-ム粒子中量、ロ-ム小ブロック少量

第37号土坑土層解説 (第23図)

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中・小ブロック少量

第38号土坑土層解説 (第23図)

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量, ローム中・小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム中・小ブロック多量, ローム粒子中量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量, ローム中・小ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム中・小ブロック中量, ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック少量
- 7 褐色 ローム粒子中量

第39号土坑土層解説 (第23図)

- 1 極暗褐色 ローム粒子中量, 白色粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量

第40号土坑土層解説 (第24図)

- 1 暗褐色 ローム粒子多量, 白色粒子少量, ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 白色粒子少量, ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム中・小ブロック多量
- 5 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量
- 6 褐色 ローム中・小ブロック中量, ローム粒子少量

第41号土坑土層解説 (第23図)

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子少量

第42号土坑土層解説 (第23図)

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 鹿沼パミス微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, 鹿沼パミス微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量, 鹿沼パミス微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック多量, ローム粒子少量

第50号土坑土層解説 (第24図)

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 白色粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量, 白色粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 4 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子中量
- 5 暗褐色 ローム中・小ブロック中量, ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量

第52号土坑土層解説 (第24図)

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量

第53号土坑土層解説 (第24図)

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 白色粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子少量
- 5 褐色 ローム粒子少量

第56号土坑土層解説 (第24図)

- 1 暗褐色 ローム, 白色粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 白色粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック・白色粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, 白色粒子微量

第57号土坑土層解説 (第24図)

- 1 黒褐色 ローム粒子多量, 白色粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム大ブロック中量, ローム粒子微量

第58号土坑土層解説 (第24図)

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック中量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック少量
- 4 黒褐色 ローム中・小ブロック少量, ローム粒子微量
- 5 暗褐色 ローム中・小ブロック多量, ローム粒子少量

表3 八丁台遺跡土坑一覧表






土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 *重複関係(新→旧)
				長さ(m)	幅(m)					
1	B4a4	N-9°-E	長方形	1.84	× 0.87	43	緩斜	平坦	人為	
2	B4c3	N-7°-E	長楕円形	2.43	× 1.29	69	垂直	平坦	人為	
3	B4a1	N-16°-E	長楕円形	1.80	× 0.47	16	垂直	平坦	自然	
8	A2i8	N-7°-E	長楕円形	2.12	× 0.84	61	垂直	平坦	人為	弥生土器片
9	A3h8	N-6°-W	長楕円形	2.13	× 0.65	30	垂直	平坦	人為	弥生土器片
10	A2h8	N-3°-W	長方形	2.72	× 0.88	52	外傾	平坦	人為	須恵器(坏)
11	A3i9	N-13°-E	隅丸長方形	1.90	× 0.66	45	垂直	平坦	人為	
12	A3i7	N-60°-W	長楕円形	2.10	× 1.05	86	垂直	平坦	人為	
13	B3e9	N-45°-W	隅丸長方形	2.43	× 1.63	67	垂直	平坦	人為	
15	A3j6	N-3°-E	長方形	2.25	× 0.90	77	垂直	平坦	自然	
17	A3i5	N-0°	隅丸長方形	1.76	× 0.57	40	垂直	平坦	人為	
19A	A3j4	N-3°-W	長楕円形	1.75	× 0.45	36	外傾	平坦	自然	SK-19B→本跡
19B	A3j4	N-0°	長楕円形	1.55	× 0.45	42	外傾	平坦	人為	本跡→SK-19A
22	A3i3	N-7°-E	不定形	1.38	× 1.07	47	緩斜	皿状	自然	
23	A3j2	N-6°-E	長方形	2.62	× 1.44	74	緩斜	平坦	人為	縄文土器片, 弥生土器片
24	A3j2	N-47°-W	(隅丸長方形)	2.72	× (1.10)	33	垂直	平坦	自然	SK-23→本跡
25	A3i1	N-13°-E	隅丸長方形	2.78	× 1.58	92	外傾	平坦	人為	
27	A3h1	N-6°-E	隅丸長方形	1.55	× 0.95	59	外傾	西凸	人為	弥生土器片

28	A2j4	N-3°-E	(隅丸長方形)	(1.07) × 0.90	55	外傾	平坦	自然	弥生土器片	
31	A2jo	N-2°-E	長楕円形	2.19 × 0.63	22	外傾	平坦	自然	弥生土器片	
32	A2jp	N-3°-E	隅丸長方形	3.16 × 1.57	123	外傾	平坦	人為	弥生土器片	
33	A2is	N-3°-W	長楕円形	2.08 × 0.69	40	外傾	凹凸	人為		
35	A2ir	N-19°-E	長楕円形	2.48 × 1.05	34	外傾	平坦	人為		
36	A2if	N-3°-W	隅丸長方形	2.24 × 0.76	27	傾斜	平坦	人為		
37	A2g6	N-13°-E	楕円形	2.08 × 1.26	62	垂直	平坦	自然	縄文土器片, 弥生土器片	
38	A2je	N-10°-E	不定形	(2.63) × (0.78)	104	垂直	凹凸	人為		SD-3 → 本跡
39	A2js	N-3°-E	隅丸長方形	2.44 × 1.42	87	外傾	平坦	人為	縄文土器片, 弥生土器片	
40	A2j4	N-2°-E	(隅丸長方形)	(2.21) × (1.64)	107	垂直	平坦	人為	弥生土器片	
41	A2is	N-11°-E	長楕円形	2.36 × 0.64	22	傾斜	平坦	自然		
42	A2es	N-6°-E	隅丸長方形	1.66 × 0.47	17	外傾	平坦	人為	須臾器(坏), 刀子	
49	B2eo	-	不明	1.65 × (0.65)	58	外傾	平坦	自然		
50	B3d1	N-3°-W	(隅丸長方形)	(1.85) × 1.49	92	傾斜	凹凸	人為		SD-1 → 本跡 → SI-3
52	A2ia	-	円形	1.36 × 1.55	23	傾斜	平坦	自然		SD-6 → 本跡
53	B4as	N-3°-W	隅丸長方形	2.56 × 0.92	71	垂直	平坦	人為		
56	B2c3	N-3°-W	隅丸長方形	2.80 × 1.42	85~103	傾斜	平坦	自然	土師器片	SD-1 → 本跡
57	B1bo	N-10°-E	隅丸長方形	1.53 × 0.94	78	外傾	平坦	人為		SD-1 → 本跡
58	B1co	N-14°-E	不定形	1.25 × (0.80)	79	外傾	凹凸	自然		本跡 → SD-1

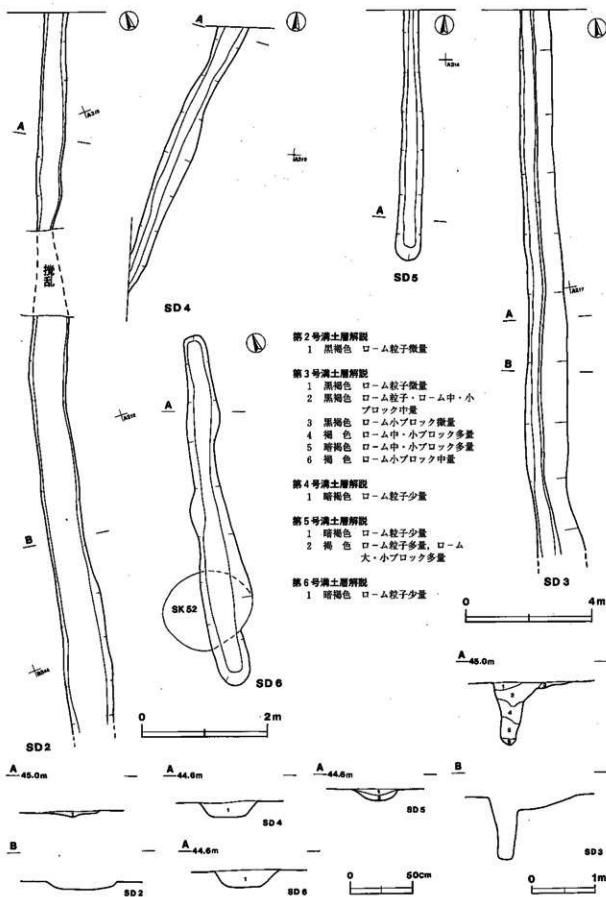
## 5 溝

当遺跡からは、溝5条を検出した。溝からは、時期を決定できるような出土遺物もなく、また、掘り込みも浅く時期の判定や遺構の性格は不明である。よって、検出した溝については、実測図及び一覧表で記載した。

表4 八丁台遺跡溝一覧表

溝番号	位置	主軸方向	形状	規模				断面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	厚さ(m)					
2	A3h4~B3a4	N-25°-E	直線	(11.5)	0.3~0.7	0.2~0.5	0.06		平坦	自然	無	時期不明
3	A2g7~B1a0	N-5°-E	直線	(17.5)	0.9~1.4	0.1~0.3	1.00		平坦	人為	無	時期不明
4	A2e1	N-22°-E	直線	( 8.5)	0.6~0.9	0.3~0.4	0.10		平坦	自然	無	時期不明
5	A2is	N-2°-E	直線	( 4.2)	0.2~0.4	0.1~0.2	0.10		平坦	自然	無	時期不明
6	A2ia	N-13°-E	直線	5.6	0.4~0.7	0.2~0.4	0.20		平坦	自然	無	時期不明





第25図 溝

## 6 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、試掘・表土除去・遺構確認の調査で出土した遺物である。それらの遺物を土器・石器に大別し、それらの特徴を解説する。

### 土器

土器を第Ⅰ～Ⅲ群に分けて記載する。

第Ⅰ群 縄文時代前期の土器群

第Ⅱ群 弥生時代後期の土器群

第Ⅲ群 古墳時代後期の土器群

#### 第Ⅰ群土器

第26図22・23・35～37は、胎土に繊維を含む縄文時代前期の黒浜式土器の胴部片である。22は単節縄文LRに円形竹管文、23・37は単節縄文LR、35・36は単節縄文RLが施されている。

#### 第Ⅱ群土器

第26図24～29は、弥生時代後期後半の二軒屋式土器である。24～28は頸部片で、24は簾状文、25はヘラ状工具による沈線文、26は山形文、27・28は櫛歯状工具による波状文が施されている。29は底部から胴部下半にかけての破片で、底部に木葉痕がある。

#### 第Ⅲ群土器

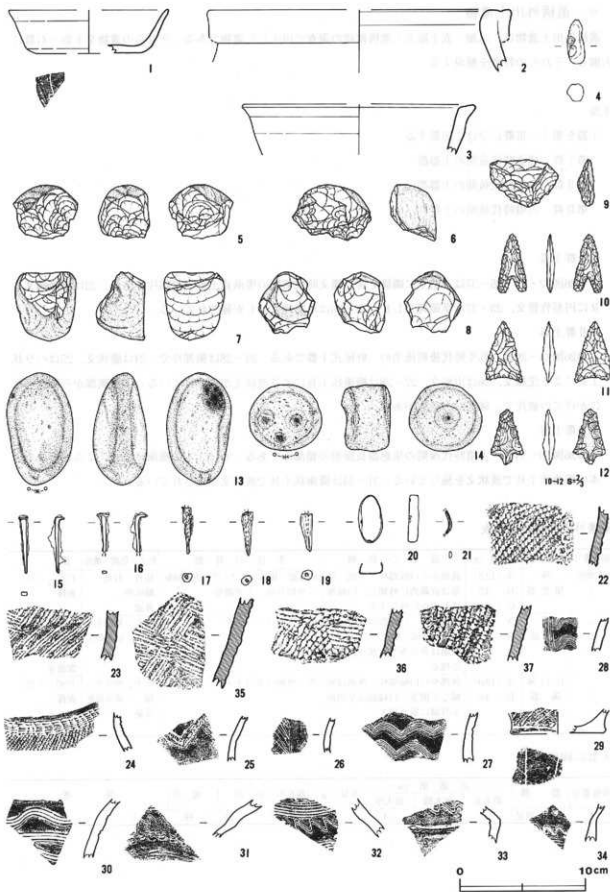
第26図30～34は、古墳時代後期の須恵器長頸壺の頸部片である。30は4本の櫛歯状工具による沈線文、3本の櫛歯状工具で波状文を施している。31～34は櫛歯状工具で波状文が施されている。

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第26図 1	環 須恵器	A (12.8) B 3.5 C ( 8.6)	底部から口縁部片。平底。体部は直線的に外傾し、口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、ナデ調整。	長石・石英 褐灰色 普通	P27、5% 表採
2	甕 陶器	A (24.2) B ( 5.0)	口縁部片。口縁部の縁帯は垂下して頸部に接合しているが、断面は折り返した部分に隙間が残る。	内・外面ロクロナデ。	胎土：褐灰色 釉：暗赤褐色 普通	P28、5% 表採 15C前半 常滑産
3	片口鉢 陶器	A (19.0) B ( 4.0)	体部から口縁部片。体部は外傾して開き、口縁部は平坦面が外側に張り出す。	内・外面ロクロナデ。	胎土：褐灰色 釉：暗赤褐色 普通	P30、5% 表採 15C前半 常滑産

土製品観察表

図版番号	器種	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
4	不明土製品	3.0	1.4	1.4	7.1	100	表採	DP5



第26图 遺構外出土遺物

石器・石製品観察表

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)				石 質	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	重量 (g)			
第26図5	石 核	4.3	5.2	4.1	111.5	安山岩	SI-2 覆土上層	Q 6
6	石 核	4.5	6.3	3.7	113.8	安山岩	SI-2 覆土上層	Q 7
7	石 核	5.5	4.8	4.0	116.7	安山岩	SI-1 覆土上層	Q 8
8	石 核	4.9	4.6	4.1	97.5	安山岩	表 採	Q 9
9	剥 片	3.8	5.5	1.3	22.6	安山岩	表 採	Q10
10	石 鏃	2.3	1.1	0.3	0.6	チャート	表 採	Q11 凹基無茎鏃
11	石 鏃	2.4	1.5	0.5	1.5	チャート	表 採	Q12 凹基無茎鏃
12	石 鏃	2.2	1.3	0.5	0.6	頁 岩	表 採	Q13 平基有茎鏃
13	磨 石	8.9	5.2	4.3	275.8	安山岩	表 採	Q14
14	凹 石	5.3	5.8	3.9	112.6	安山岩	表 採	Q15 磨石兼用

金属製品観察表

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)				出 土 地 点	備 考
		長 寸	幅	厚 寸	重量 (g)		
15	不明鉄製品	(4.4)	(0.5)	(0.3)	(21)	SK-11 覆土上層	M 1
16	不明鉄製品	(3.0)	(0.3)	(0.2)	(18)	SK-11 覆土上層	M 2
17	不明鉄製品	(3.8)	(0.8)	(0.2)	(11)	SK-11 覆土上層	M 3
18	不明鉄製品	(3.6)	(0.9)	(0.3)	(16)	SK-11 覆土上層	M 4
19	不明鉄製品	(3.0)	(0.9)	(0.3)	(17)	SK-11 覆土上層	M 5
20	硝瓦金具	3.8	1.9	0.9	4.6	表 採	M 6 銅製
21	不明銅製品	(1.8)	0.2	0.5	(0.6)	SK-42 覆土上層	M 8

## 第4節 まとめ

当遺跡の調査により明らかになった遺構は、竪穴住居跡3軒、古墳2基、土坑2基、堀1条、不明土坑3基、溝5条である。ここでは、時期別に各時代の主な遺構と遺物の概要及び土坑について述べ、まとめとする。

### 1 旧石器時代

旧石器時代の遺物は、石核が4点、剥片が1点の計5点出土している。石核は、弥生時代後期後半の第1号住居跡から1点、第2号住居跡から2点、いずれも覆土上層から出土している。石核1点と剥片は表面採集である。

### 2 縄文時代

縄文時代の遺構は検出されなかった。縄文時代の遺物は、縄文時代前期の黒浜式土器が、調査区東部の第2号墳の北側部で集中して出土している。

### 3 弥生時代

当遺跡の中心となる時期である。住居跡が3軒検出され、いずれも弥生時代後期後半の二軒屋式期のものである。

第1・2号住居跡は、平面形がいずれも隅丸長方形である。主柱穴は炉を中心に配置され、結んだ線は長方形となる。貯蔵穴は検出されていない。第2号住居跡は、炉北側に深さ10cmほどの小ピットが集中しているが、性格は不明である。出土遺物は、炉内からガラスの小玉が1点ずつ出土している。第1号住居跡からは、那珂川下流域左岸に位置する東中根遺跡を標式とする東中根式土器の口縁部片が1点出土している。

### 4 古墳時代

下館市の古墳の分布は、大谷川右岸台地の縁辺部で、野殿深作東遺跡<sup>(1)</sup>に近接する野殿古墳群（うち1基の主体部は礫小口積石棺）が認められるほかは、鬼怒川左岸台地上の女方古墳群<sup>(2)</sup>（円墳数余基）と弁天古墳群（円墳2基）が確認されている。女方古墳群の円墳3基（主体部は竪穴式石室・礫小口積石棺）が学術調査されている以外は、本格的な調査は行われておらず不明点が多い。

当遺跡からは、古墳2基が検出された。第1号墳は円墳、第2号墳は方墳で、いずれも河原石の小口積みによる横穴式石室である。第1号墳は、調査区西部で検出され、主体部の一部は攪乱されており、遺物も土製管玉だけである。第2号墳は、調査区中央部で検出され、遺物は須恵器長頸壺、須恵器甕の胴部片である。第1・2号墳は、いずれも墳丘が削平されており、封土の状況は不明である。時期は、出土遺物が少量であるが、形態などから7世紀代であると思われる。

### 5 平安時代

平安時代の遺構は、第10・42号土坑の2基である。2基とも調査区西部北側部で検出されている。平面形は、第10号土坑が長方形、第42号土坑が隅丸長方形である。出土遺物は、須恵器坏で、第42号土坑からは刀子が1点出土している。2基とも性格は不明である。

## 6 中世

調査区を東西に横断する堀が105.6mにわたって検出されている。形状は、西部で逆台形状、東部で素研堀状である。八丁台遺跡の位置する台地上には、八丁台遺跡から北約0.8kmほどに伊佐城跡、南約1.1kmほどに下館城跡がある。下館城は、平城で堀を南北に三重にめぐらし別名「螺城」といわれ、本遺構と何らかの関連があると思われる。

## 7 八丁台遺跡の土坑について

当遺跡からは、遺物が出土せず、時期及び性格不明な土坑が35基検出されている。第23・25・32・37・39・40・50号土坑は、平面形が長方形・楕円形・隅丸長方形を呈し、いずれも2段に掘り込まれている。規模等は一覧表に示した通りである。しかし、古墳が2基検出され、これらの土坑と古墳主体部の主軸がほぼ同じ方向を示していることや、形跡や規格などから墓塚の可能性も考えられる。類例としては、土浦市十三塚B遺跡<sup>(3)</sup>の第1～5号土坑がある。平面形は隅丸長方形を呈し、2段に掘り込まれており、長軸方向は同遺跡の第1号古墳の主軸とほぼ同じ方向を示し墓塚と考えられると報告されている。また、新治村田宮古墳群<sup>(4)</sup>では、第23・26号土坑が長方形の整った形状を呈し、6世紀後半から7世紀前半に比定される提瓶が出土している。当遺跡と同じく2段に掘り込まれた土坑で、古墳群に近接して検出されている。

### 注

- (1) 下館市教育委員会 「野殿深作東遺跡」1996年3月
- (2) 八幡 一郎 「茨城県真壁郡女方古墳群」『日本考古学年報 5』 1957年3月
- (3) 茨城県教育財団 「永国地区住宅団地建設予定地内埋蔵文化財調査報告書 寺家ノ後A遺跡 寺家ノ後B遺跡 十三塚A遺跡 十三塚B遺跡 永国十三塚遺跡 旧鎌倉街道」『茨城県教育財団文化財調査報告第60集』 1990年3月
- (4) 茨城県教育財団 「一般国道125号道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 田宮古墳群遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第57集』 1990年3月

### 参考文献

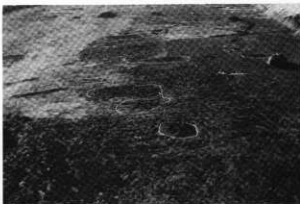
- ・下館市教育委員会 「下館の文化財」 1992年3月
- ・下館市教育委員会 「野殿深作東遺跡」 1996年3月
- ・茨城県教育財団 「茨城県東西生涯学習センター建設用地内埋蔵文化財調査報告書 野殿深作遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第91集』 1993年3月

写 真 图 版

八 丁 台 遺 跡



調査前全景



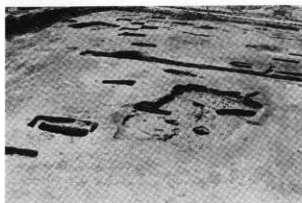
遺構確認状況



遺構確認状況



調査完掘全景



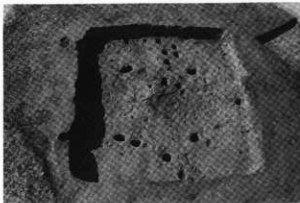
調査完掘全景



第1号住居跡, 第8・10号土坑完掘



第1号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡完掘





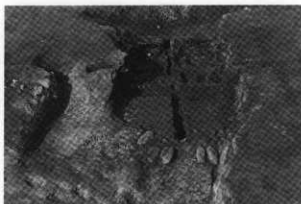
第2号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡遺物出土状況



第3号住居跡完掘



第1号墳完掘



第1号墳土層



第2号墳全景



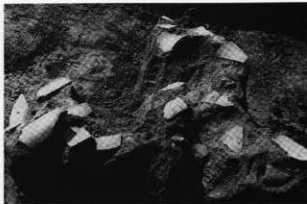
第2号墳確認状況



第2号墳石室南壁(北から)



第2号墳主体部確認状況(北から)



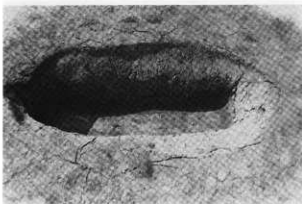
第2号墳遺物出土状況



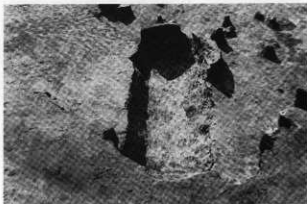
第1号堀完掘



第1号土坑完掘



第2号土坑完掘



第10号土坑完掘



第23号土坑完掘



第27号土坑完掘

PL 4



第32号土坑完掘



第37号土坑完掘



第39号土坑完掘



第40号土坑完掘



第42号土坑完掘



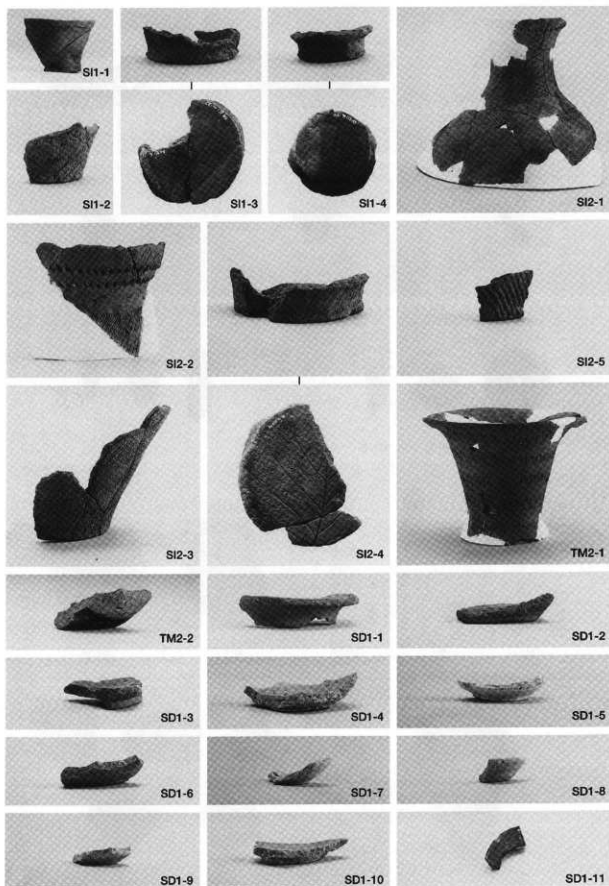
第42号土坑遗物出土状况



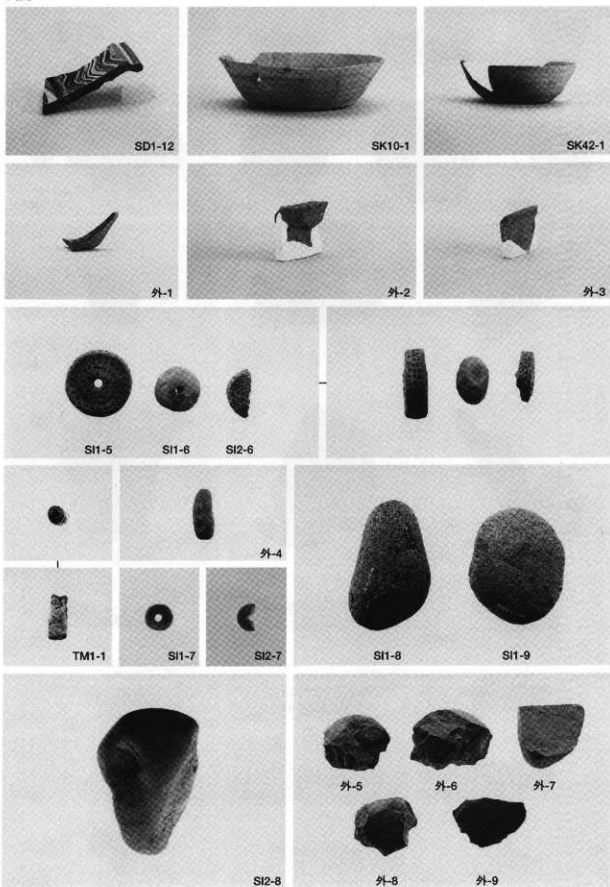
第50号土坑完掘



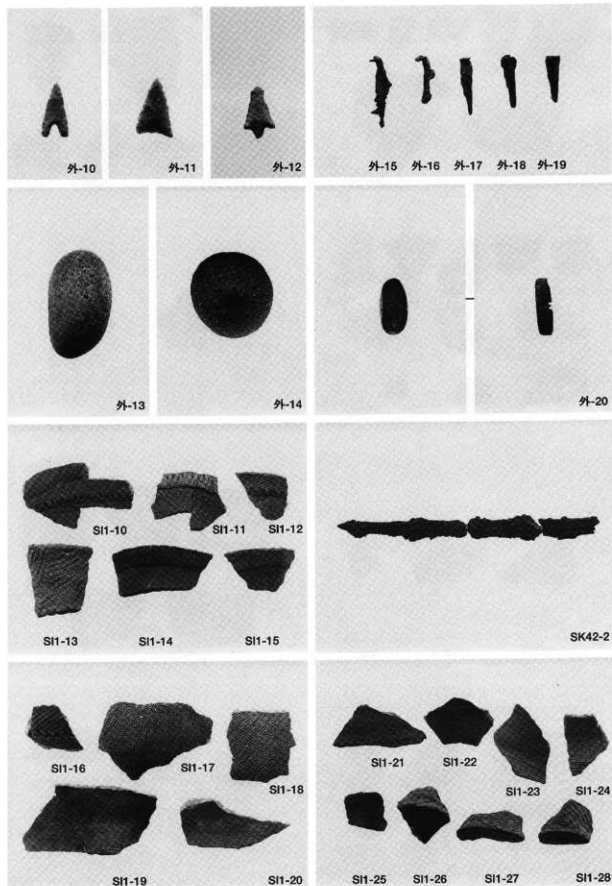
第53号土坑完掘



第1·2号住居跡，第2号墳，第1号堀出土遺物

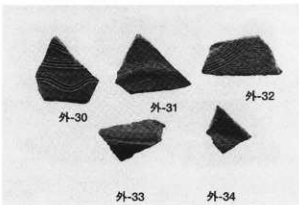
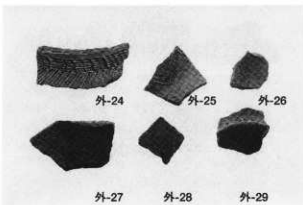
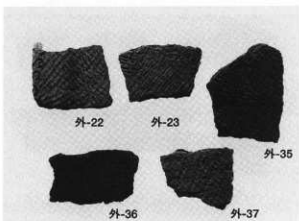
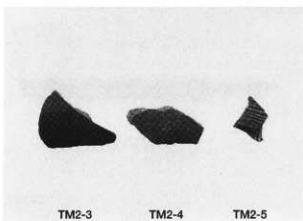
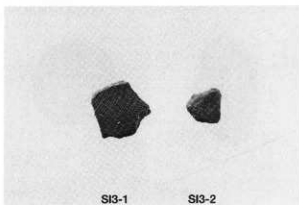
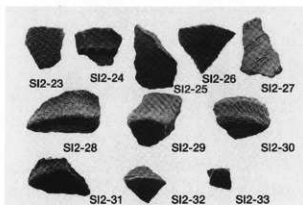
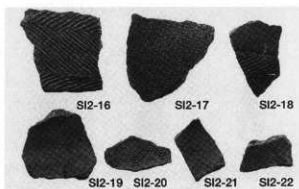
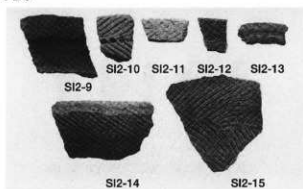


第1・2号住居跡，第1号墳，第1号堀，第10・42号土坑，遺構外出土遺物



第1号住居跡，第42号土坑，遺構外出土遺物

PL 8



第2・3号住居跡，第2号墳，遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第138集  
一般国道50号下館バイパス改築工事  
地内埋蔵文化財発掘調査報告書  
八丁台遺跡

平成10(1998)年6月26日 印刷

平成10(1998)年6月30日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
TEL 029-225-6587

印刷 株式会社 あけぼの印刷社  
〒310-0804 水戸市白梅1丁目2番11号  
TEL 029-227-5505